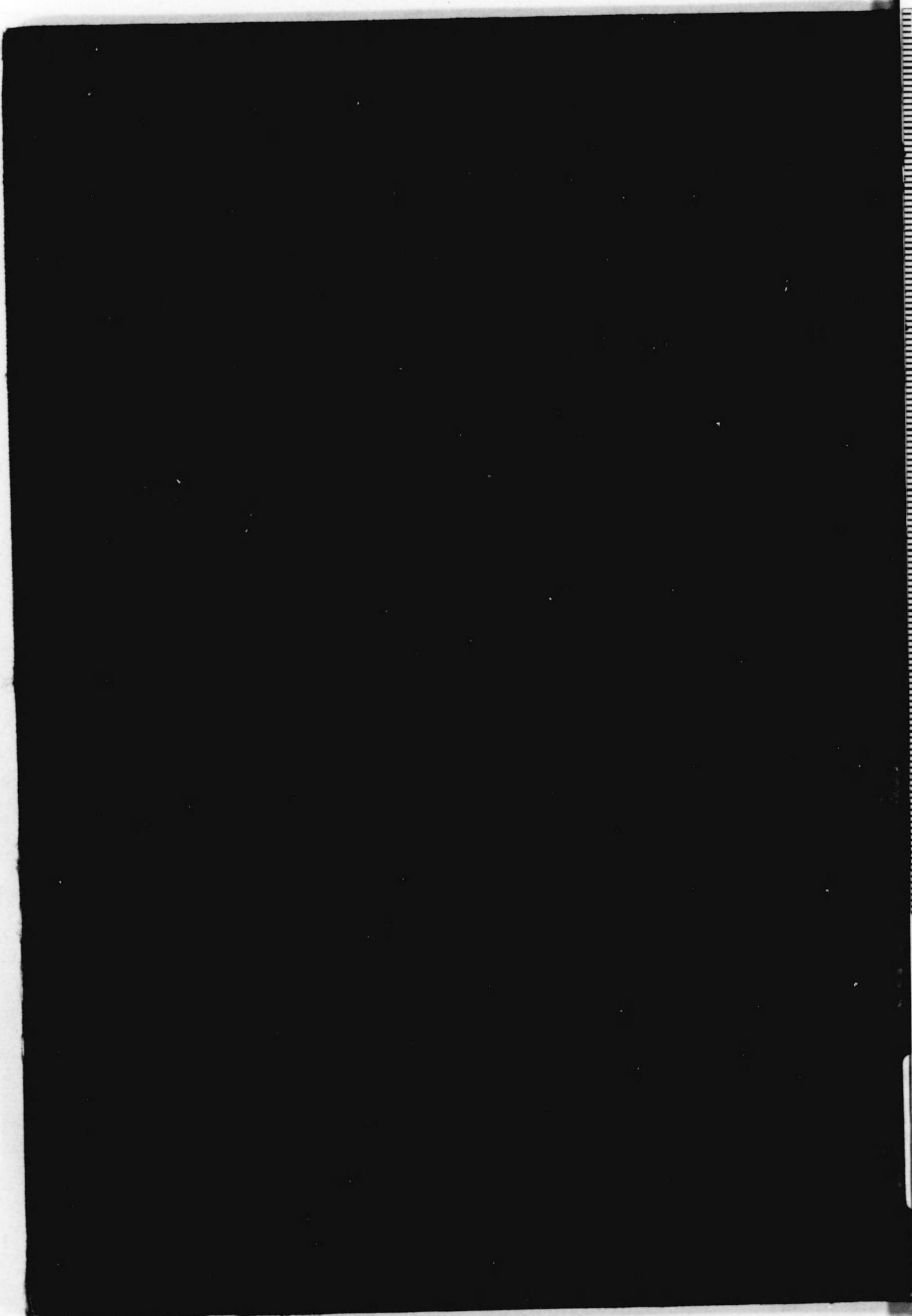


始



陳述

和公史蹟小記

特 231  
746

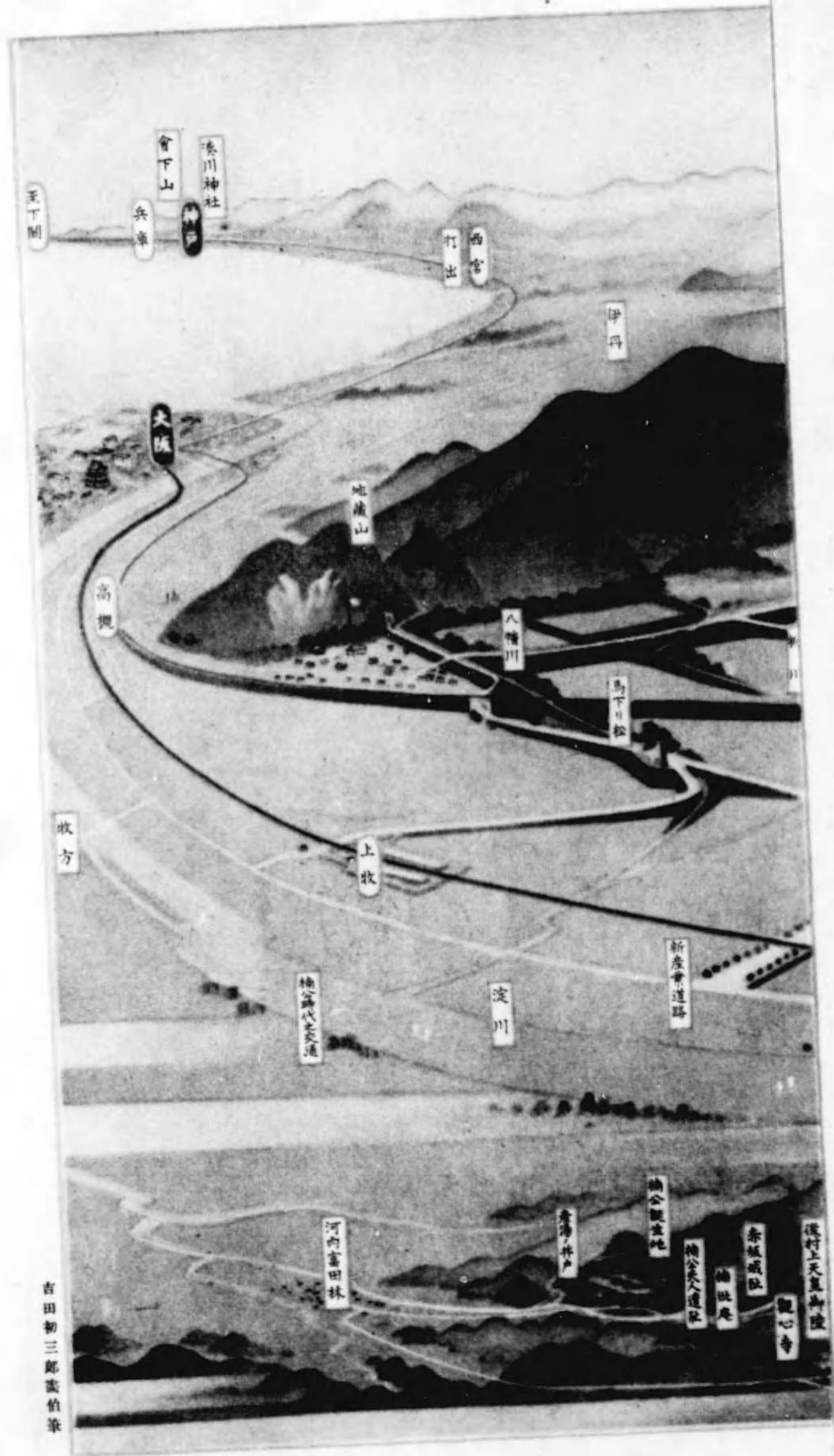


楠  
公  
史  
蹟  
小  
話



生ける楠公





吉田初三郎畫竹筆

櫻井驛を心中せしむる公の史蹟圖

重紀 二十 六 百 一 瀬 氏 高 瀬 印 標



吉田三郎重治筆

楠公史蹟小話目次

緒言	一
後鳥羽天皇の御雄志	二
後醍醐天皇と大楠公	七
大楠公の誕生及誕生地	八
大楠公誕生地の修理	一〇
觀心寺	一一
大楠公の首塚	一二
別格官幣社湊川神社	一四
天野山金剛寺	一七
小楠公の首塚	一九
四條畷及飯盛山の戦	二三
吉野朝廷	二三
大楠公の墓	二三
櫻井楠公父子訣別の畫。朱舜水の贊	二六
湊川大楠公の墓碑	二七

櫻井驛趾楠公父子訣別の地……………三〇

英國公使パークス氏楠公父子の忠誠に感じて建碑……………三三

櫻井驛趾の修理擴張……………四一

楠公の勤儉尙武勸農の撫育……………四九

大楠公の先見……………五一

楠公の心中感慨無量……………五三

楠公観……………五三

誠……………七

楠公の人生観……………七

百鍊一死の覺悟……………八

楠公の人と爲り……………八

楠公崇拜者……………八

島本村の奉仕……………八

最後の所感……………九

楠氏の由緒……………九

七生説……………一〇

櫻井驛趾ニ立チテ感アリ……………一〇

# 楠公史蹟小話

一瀬 彙吉 述

## 緒言

過日赤十字社大阪支部病院長の前田博士と或る會合で御同席の節、先般大阪ロータリー俱樂部でハイキングの催があつて、河内の楠公遺蹟巡りを致しました際、所々で種々尊き寶物を拜觀し、又珍らしき話を聽き、大いに感銘が深かつたとのことでありました故、私は「それではその節斯々の事も御聽きになりましたか」と大楠公首塚の碑文や足利義詮よしあきらの墓のこと等を申し上げました處「それは少しも知らなかつた、それでは一度ロータリー俱樂部の席上で話をして呉れぬか」とのこと、つい釣り込まれ



て御話することに安受合を致しました。併し考へて見ると私の御話は單に片々たる隻話に過ぎざるのみならず、是等は江崎政忠さんの御話になる御領分であつて、私共にとつては越限であり、又淺學寡聞の及ぶところでありませんから、他日改めて江崎さんに訂正して戴き度いと存じて居ります。先づ話の順序として今更改めて申上げるまでもなく皆様疾くに御存知のことゝ存じますが、最初に歴史の一部に就て申上げて見たいと存じます。

○ 後鳥羽天皇の御雄志

後醍醐天皇、後村上天皇の皇政復古の大御理想は是より先 後鳥羽天皇の御時に御發意なされて在らせられたので御座います。然るに 後鳥羽天皇は天下一統御親政の御雄志を御抱きに相成りましたにも拘はりませず、時運非にして事御志と違はせ給ひ遂に北條義時のために御自らは隱岐に 土御門天皇は土佐後ち阿波に、又 順徳天皇

(以上天皇御譲位後は何れも  
上皇と申上げ奉り居ります)は佐渡に申すも畏れ多き極みで御座いますが、孰れも絶海の孤島か或は四國の僻陬に御遷幸遊ばされたので御座いました。

後鳥羽天皇は文武の御道に勝れさせ給ひ御多藝御多能に在はしまして、彼の菊一文字の御刀劍を御鍛へさせ給ひしことは御有名にして、殊に御歌道に御堪能で在らせられ、新古今和歌集の御親撰は御偉業の隨一と申稱へられて居ります。

御製の中に

見渡せば山本かすむ水無瀬川

夕は秋と 何思ひけむ

奥山のおどろが下もふみ分けて

道ある世ぞと 人に知らせむ

人も惜し人もうらめしあじきなく

世を思ふゆゑに もの思ふ身は

われこそは新島守よ隱岐の海の

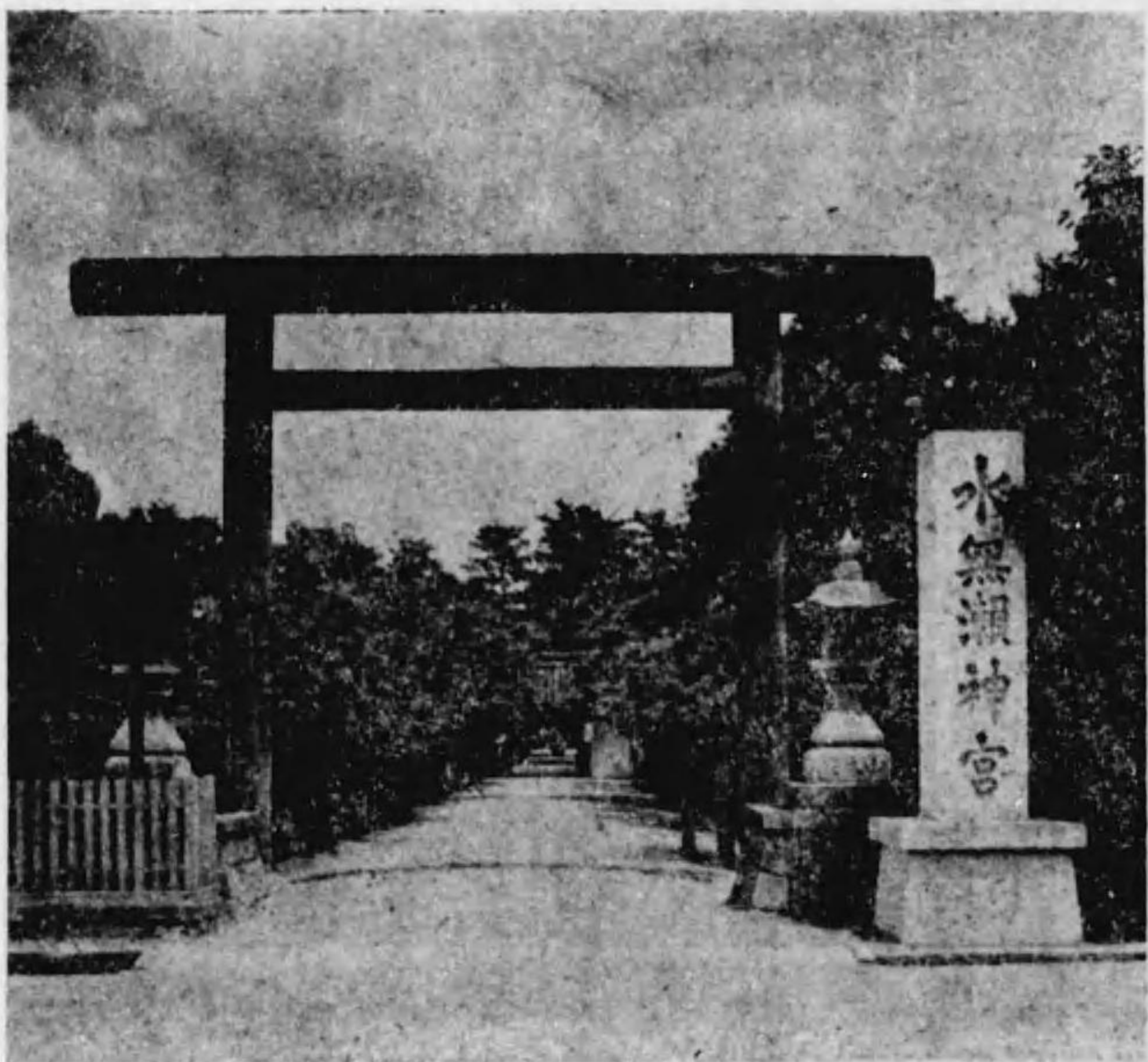
あらし浪風 こゝろして吹け

水無瀬山わが故里はあれぬらん

まがきは野らと 人も通はで

など珠玉の御製中の代表的のものとして古來國民の間に洽く拜誦されて居ります。

後鳥羽天皇は隱岐に御佗住居十九年の間空しく皇權御恢復の御一念を御抱かせられ給ひしまゝ其の御實現を御覽遊ばさるゝに御至らせられずして汐風吹き荒ぶ沖の小島に萬事御不如意のうちに崩御遊ばされ、其の御一生の御不運は誠に御痛ましき御限りでありまして恐懼悲憤の極みと申上げねばなりません。天皇の崩御に先だつ十四日前、御悲痛なる御置文に御兩方の御掌に朱を御塗りになつて御押せさられ給ひ、之れを臣下の水無瀬父子に御下げ渡しに相成りました。供奉の者は天皇が御遺骸とならせられ還御遊ばさるる際、御在世中の御心を御察し申上げ沿道の名所等一々在はします如く、言上しつつ御供を申上げ奉つたとの御趣であります。如何に都を御慕はしく御思召し遊ばされ、還御の日を一日千秋の御思にて御過ごし遊ばされ給ふたかは、御



官幣大社水無瀬神社

心中の程御察し奉るだに只々涙の溢るる外ありませぬ。彼の攝津の水無瀬の山川は天皇在はしますの日、殊の外その風光の明媚を御愛でさせ給ふた所で御座います。爾來七百年の長き歲月を経て、御三方を御祀り奉る水無瀬宮が今回勅命に依て神宮と御改稱に相成り、同時に官幣大社に御昇格遊ばされ給ひたことはいとも畏き次第であります。尙御祭祀には御在世中御供への式を以て七百年の今も引續き御奉仕申上げて居るとの御趣で

あります。其の後、昭和十四年に至り御由縁深き隠岐の島に、各御舊跡を清掃して四月三日海士村には隠岐神社、三月二十七日黒木村には黒木神社を御建立して、兩天皇の御英靈を御祭り奉ることに相成りました。

倭、後鳥羽天皇より約百年を経て、後醍醐天皇の御代に至り、天皇は延喜、天曆の醍醐、村上兩天皇の御治世を深く御慕ひ遊ばされ、御在世の間に御自ら後醍醐院と豫め御諡號を御定めに相成つた程であります。後村上天皇も亦御同様の叡慮であらせられ給ひ觀心寺の御陵も其の御後を追はせさせ給ふこととなり、後村上院と申上げ奉りたる御趣であります。

建武中興は明治維新の鴻業の先驅を爲すものでありまして、更に之れを溯つて見ますれば眞に後鳥羽天皇に御遠因を發する次第でありまして、後鳥羽天皇の承久の御聖舉より後醍醐天皇の建武中興の御聖業に至るまでは種々の事實を経て、其の間切つても切れない御關係がありたるものと存じます。然るに明治維新に至り回天の業成り文武兩權とも一途に歸し、大政萬機を御親ら御統治遊ばさるることに相成完全に御目的

を御達成させられ給ひましたので茲に、後鳥羽天皇の御英靈も亦さこそ御満足遊ばされ給ひし御事と存じ上げ奉ります。

○後醍醐天皇と大楠公

右の如く後鳥羽天皇と後醍醐天皇とは皇政復古の御志を同じく遊ばされ、之が御達成に御企圖中、謀洩れて遂に笠置山に蒙塵ましますことと相成りました。更に笠置を御落ち延び遊ばさるる際、畏れ多くも

御製に

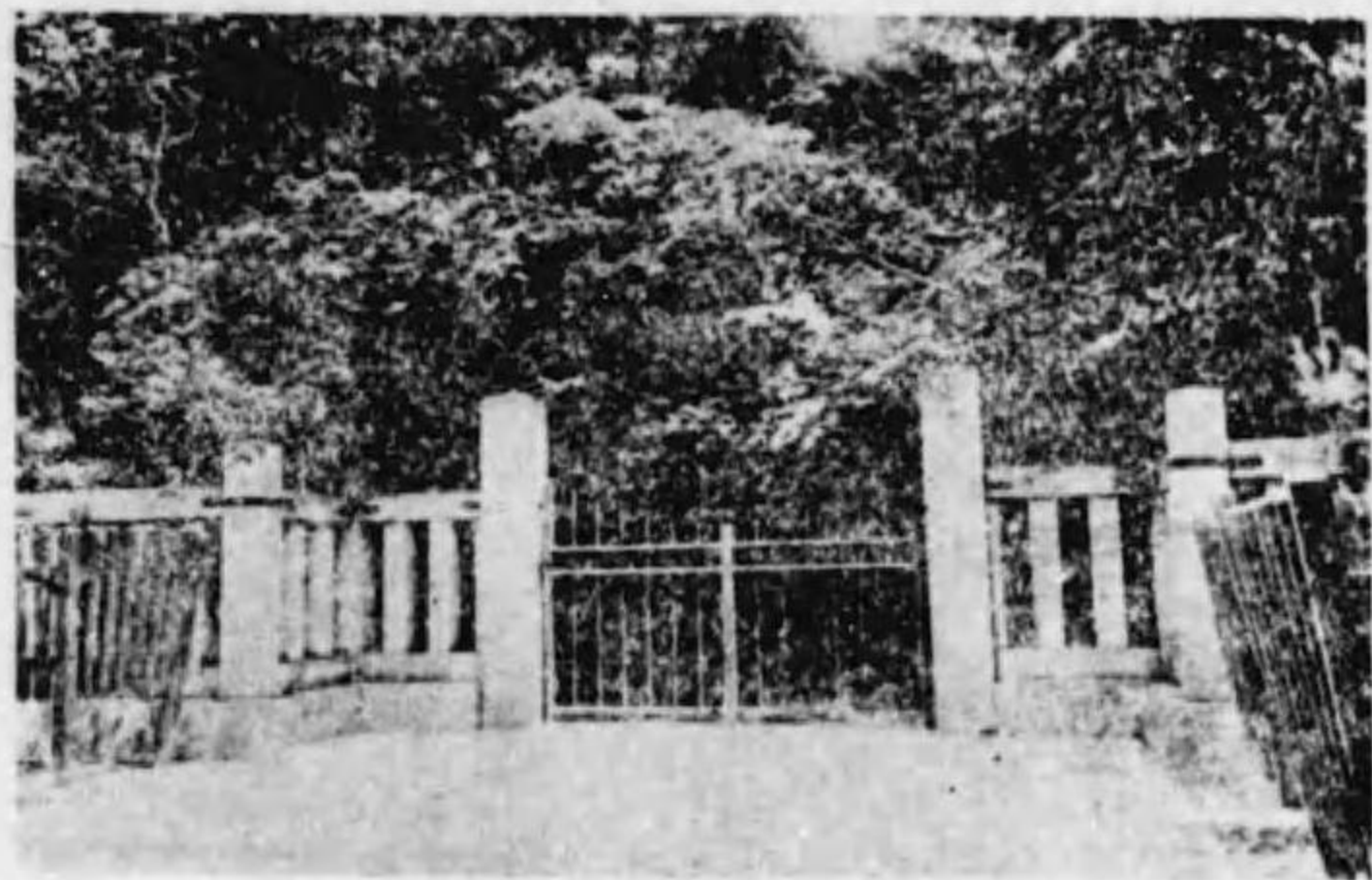
さして行く笠置の山を出でしより

雨が下には かくれ家もなし

藤原藤房卿泪を押へて即下に

いかにせんたのむ蔭とて立ちよれば

なほ袖ぬらす 松の下露



笠置山行在所跡

洵に拜するだに胸塞がり恐懼の極みに堪えぬ次第であります。

元弘元年九月三日楠公は畏くも勅に依り御召出に預り笠置の行在所に於て、初めて謁を賜はり大命を拜受し、平素養へる大信念に基き御請を即答し奉り、直ちに居城赤阪に歸へり準備に着手し、尋いで千早城に據りて百萬と號する北條勢の大軍を一手に引受け二千の寡兵を以て克く敵軍を惱まし遂に退却せしめ、建武の中興を見るに至り以後益々皇室に對し無二の誠忠を捧げ奉るに至つたのであります。

○大楠公の誕生及誕生地

大楠公は鎌倉時代、伏見天皇永仁二年四月二十五日大阪府南河内郡赤阪村大字水分小字山ノ井に呱呱の聲を上げらる。兩親が平素信仰せる信貴山の毘沙門天即ち多聞天

に祈願して生れられたといふに因み多聞丸と名づけられたのであります。誕生地を距

る北一丁の處に楠家累代常用の井戸あり、清水湧出で楠公誕生の時産湯に使用せりと傳へらる。

楠公誕生地産湯の井戸

誕生地は千早川、水分川を以て自然の要害と爲り、川を隔つる西南の丘陵は赤阪城址にして峯巒南は千早城址に連なり高く仰ぐは金剛山にして、東鬱蒼たる高臺には

府社建水分神社あり、楠家累代の産土神社にして、現在の社殿は後醍醐天皇が楠公に命じて造營し給ひし特別保護建造物であります。又境内の攝社南木明神は楠公歿後、其の忠誠を無窮に傳へんとて後醍醐天皇が正行に命じて神像を作らしめ給ふた所にして神號は後村上天皇より賜りたるものであります。

楠公邸址は赤阪村大字桐山にありたるも、一族國難に殉じたる後は賊手に委ねて全く荒廢に歸したものであります。

誕生地東三丁淨心寺山に「非理法權天」の記念塔あり、臺石には陸軍大將林銑十郎氏の題辭を刻みてあります。

楠公夫人に就ては的確なる史料なく楠妣庵の遺跡も種々の疑問あるも二條公爵を會長とせる楠妣庵保勝會に依りて今は種々の設備ありて面目一新するに至りました。

○大楠公誕生地の修理

明治八年彼の有名なる大阪會議が終つた後、大久保利通公は税所堺縣令に楠公誕生地を案内せよと



大楠公誕生地

命ぜられました處、其の場所が判らなかつたので公は大いに怒られ、我々西郷、木戸伊藤等と共に維新の大業に翼賛し奉りたるのも皆楠公精神に基きたるに、今や其の所在も分明せずとは何事ぞ、と叱責せられたので、税所縣令も大いに恐縮し、其の後楠公誕生地を改修せられたとのことであります。寫眞の「楠公誕生地」の文字は公の筆であります。

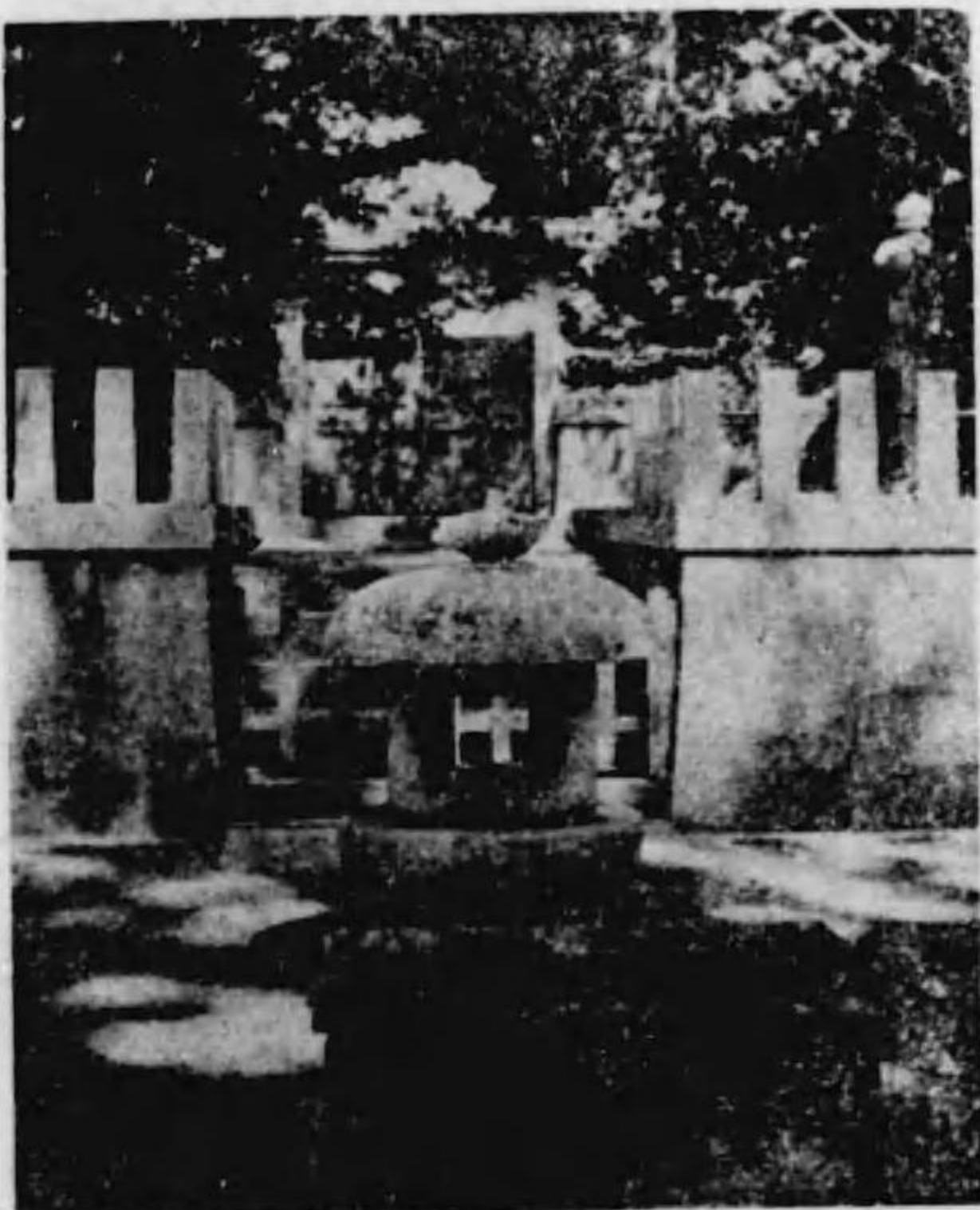
○觀心寺

觀心寺に就ては皆様のハイキングコースの第一番であり、緣起、建物、寶物其の他楠公の修業等につき充分御研究になつたこととして、私は茲に省畧致します。正成公湊川に戰死せらるるや、尊氏も其の精神に感じて、公の首級を河内に送りましたから之を菩提寺たる中院に葬り、改めて觀心寺境内に葬りましたが、尊氏は年來の交誼に依り家臣を使とし、首級と共に弔詞を送りたるは、敵將に同情と敬意を表したるものと存ぜられます。又尊氏は楠公に對しては曾つて誹謗惡口を放ちたることなきは全く

楠公の徳望の然らしむる所なりと存じます。尙楠公家族は以前赤阪村にありたるも北條討伐の擧起りたる後は、菩提寺たる中院に移住し例の小楠公の切腹せんとするを母の久子夫人が差止めて訓諭切諫せられたる美談はこの中院で今猶存在してあります。

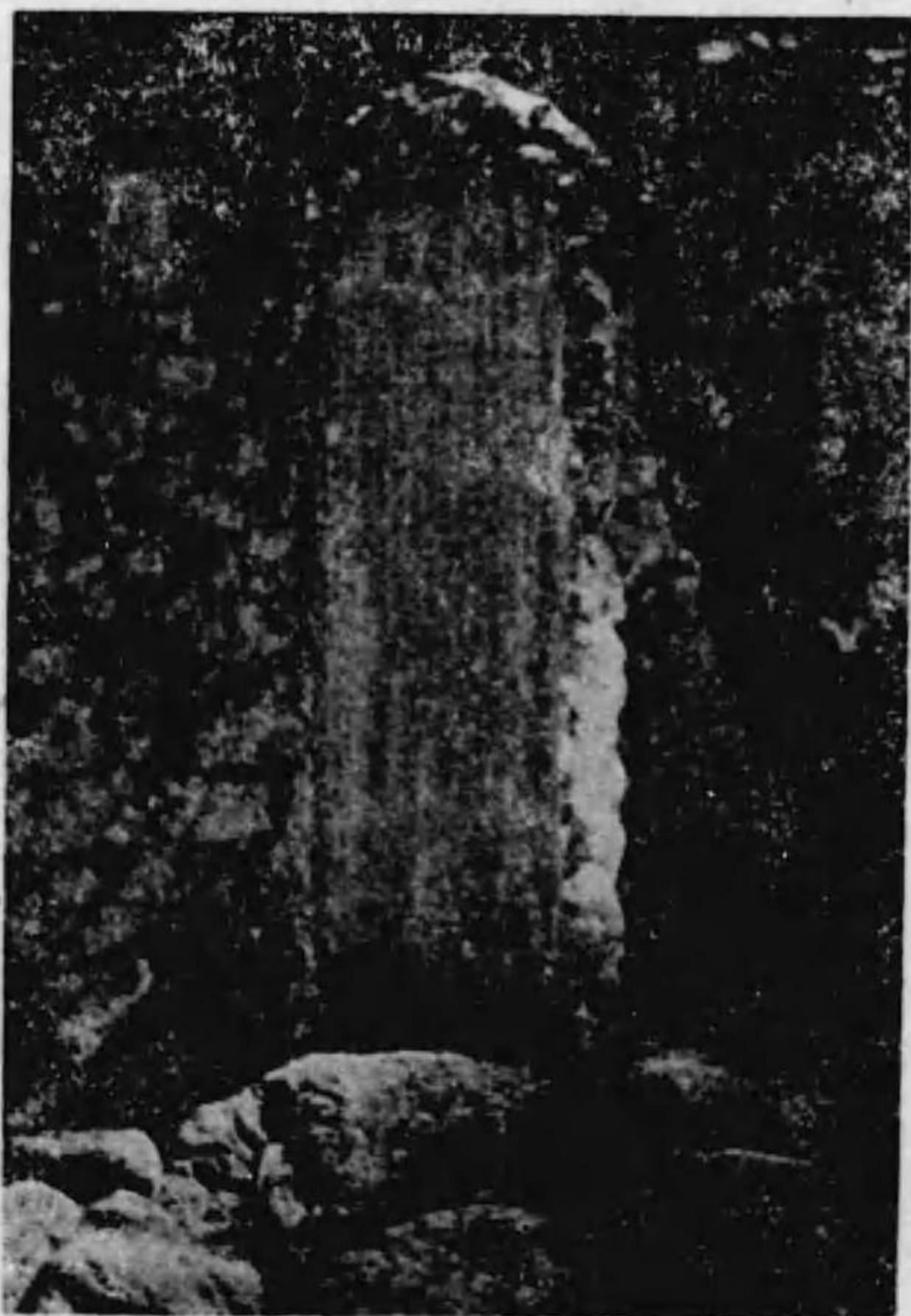
○大楠公の首塚

観心寺の後村上天皇の御陵を下りましたところに大楠公の首塚がありまして其の傍に碑石が建つて居ります。その碑文は篠崎小竹先生の撰に成るもので先生は齋藤拙堂、野田笛浦兩先生に御相談の上最初の草稿の中にあつた「人疑楠公爲朝敵」の七字を削除せられました。又、その結文に「此地及湊川に神社として祀祭



大楠公首塚

の典を起し以て岳飛の廟の如く盛んに祭られんことを期すべきなり」との意味の文字があります。この小竹先生の豫言は正に的中して三十年の後に楠公最後の決戦地である兵庫に湊川神社が建立せらるるに至りました。尙、観心寺の境内にある中井履軒先生（大阪町人の經學の稽古堂たる私塾懷徳堂の鴻儒にして、山陽先生も或時は此門に入れりとも傳ふ）のお書きになつた石燈籠の銘に「忠廻斜日義陵清霜楠公之元千載如生」の名句があります。實に其の通り楠公は死せるにあらずして現に六百年後の今日立派に精神上に生き永らへて、世道人心を指導維持せられつつあるのであります。



篠崎小竹先生碑文

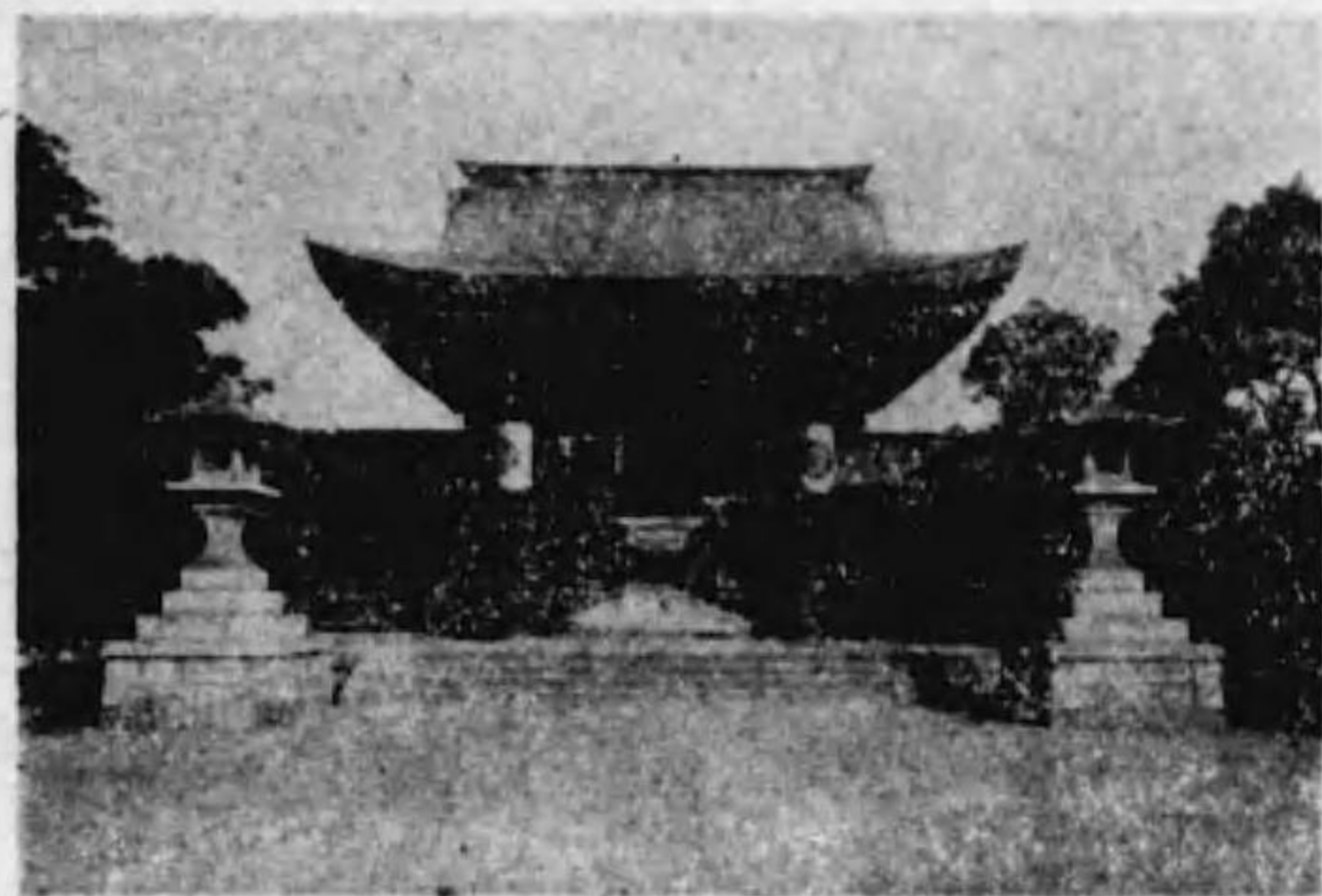
○別格官幣社湊川神社

湊川神社は明治四年より建設に着手し翌年五月に竣工しましたが、一時社名が確定せぬ時がありました。其の間に誰言ふともなく楠公さんと楠公さんと廣く申上げたのであります。此の神社は別格官幣社として現在二十七社の中で第一番に定められた稱號であります。畏くも 明治天皇は御製を下し給うて

あだ波をふせぎし人はみなと川

神となりてぞ 世を守るらむ

と仰せられ、又兵庫裁判所(當時の行政廳)の告示に依れば畏くも楠公を千載の一人臣子の龜鑑なりと仰せ出されて居るのであります。之を以て見ましても大楠公は皇國に於ける忠臣の鑑であり、武士道の權化であり、永世護國の神様



別格官幣社湊川神社

であることは明らかに知るべきであり、尙、畏くも湊川神社の御神靈には明治五年四月二十四日、明治天皇御躬ら「正成神靈」と御染筆遊ばされたる御趣に傳へ承つて居ります。實に其の神格こそいと尊ふとけれと存じます。

湊川神社建設に就いては尾州の徳川慶勝公が慶應三年十一月政府に建白せられ、明治元年四月朝廷より神社御造營を仰せ出されて居ります。それより先き元治元年島津久光公より申請あり、又三條公、東久世伯竝に伊藤博文公、寺島宗則伯、岩下方平子等の御盡力に依つたと云ふことが申傳へられて居ります。殊に東久世伯が姫路に御滞在特別御盡力があつた事實があります。彼の建武中興の賞罰に就いては種々議論があります。例へば楠公は御生前には従五位檢非違使であり、足利尊氏は従二位參議であつたのであります。明治十三年七月二十日 明治天皇西國御巡幸の節、遂に大楠公に正一位を贈り賜ひました。楠姓には五爵の人一人もなしと雖、楠公の死後事實の論功行賞として詮ずれば明治五年四月二十九日湊川神社の神號を賜りイの第一番に別格官幣社として楠公を神に祭り上げられたることであつて、之れは見逃がし難き楠

公第一位の行賞の證據であります。凡そ人には現世に振ふものと、後世に至るに隨ひて光を放ち振ふものがあります。前者は短く後者は永久に傳はり慕はるるものがあります。これを以て見ましても菅原道真公や和氣清麿公や楠正成公は、形の上では失敗者の如く見えますけれども、之を彼の藤原の時平及北條、足利二氏に比して決して不運失敗を招かれたるものと言ふを得ず。否、天昭々として今や名實共に遙かに優り、全然比較にならぬ程臭芳雲泥の差であります。今日楠公の誠忠愈々顯著となり、海外にまでも其の名轟き渡り光り輝けるのも洵に所以であります。殊に明治十三年七月二十一日 明治天皇には畏くも御親拜を賜はり更に昭和四年六月七日畏くも今上陛下に於かせられましたは關西行幸の砌御躬から御親拜を賜はりましたことは恐らく靖國神社の外、類例なく餘榮極まれりと申すべきであります。

大楠公

梁川星巖

豹死留皮豈偶然、  
人生有限名無盡、

湊川遺跡水連天、  
楠氏精忠萬古傳。

同

西郷隆盛

奇策名籌不可摸、  
懷君一死七生語、

正勤王事是真儒、  
抱此忠魂今有無。

同

大國隆正

くやしきも笠置の夢はさめにけり

湊河原のなみのさわぎに

同

眞木保臣

すめる世も濁れる世にも湊川

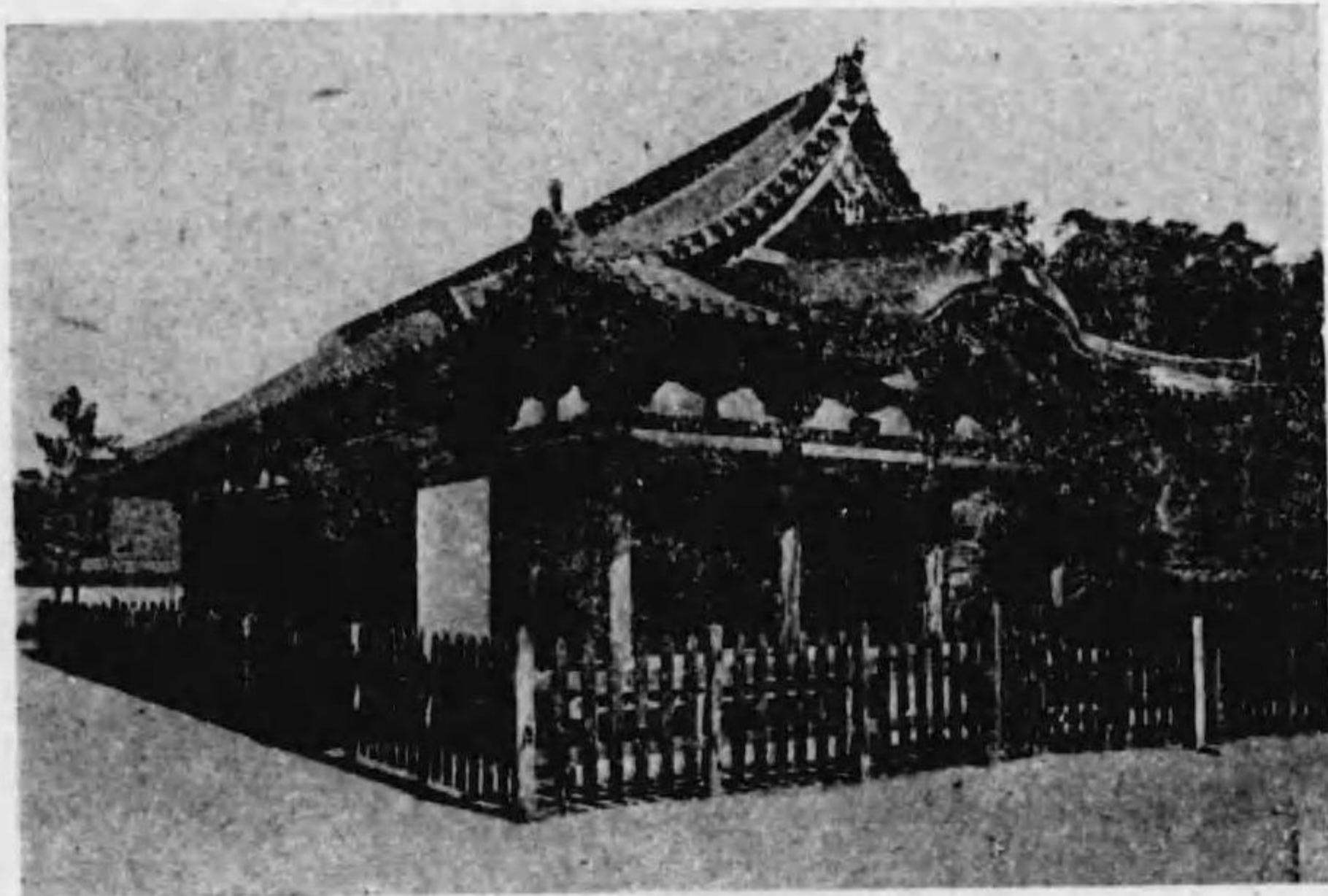
絶えぬ流れの水や汲ままし

○天野山金剛寺

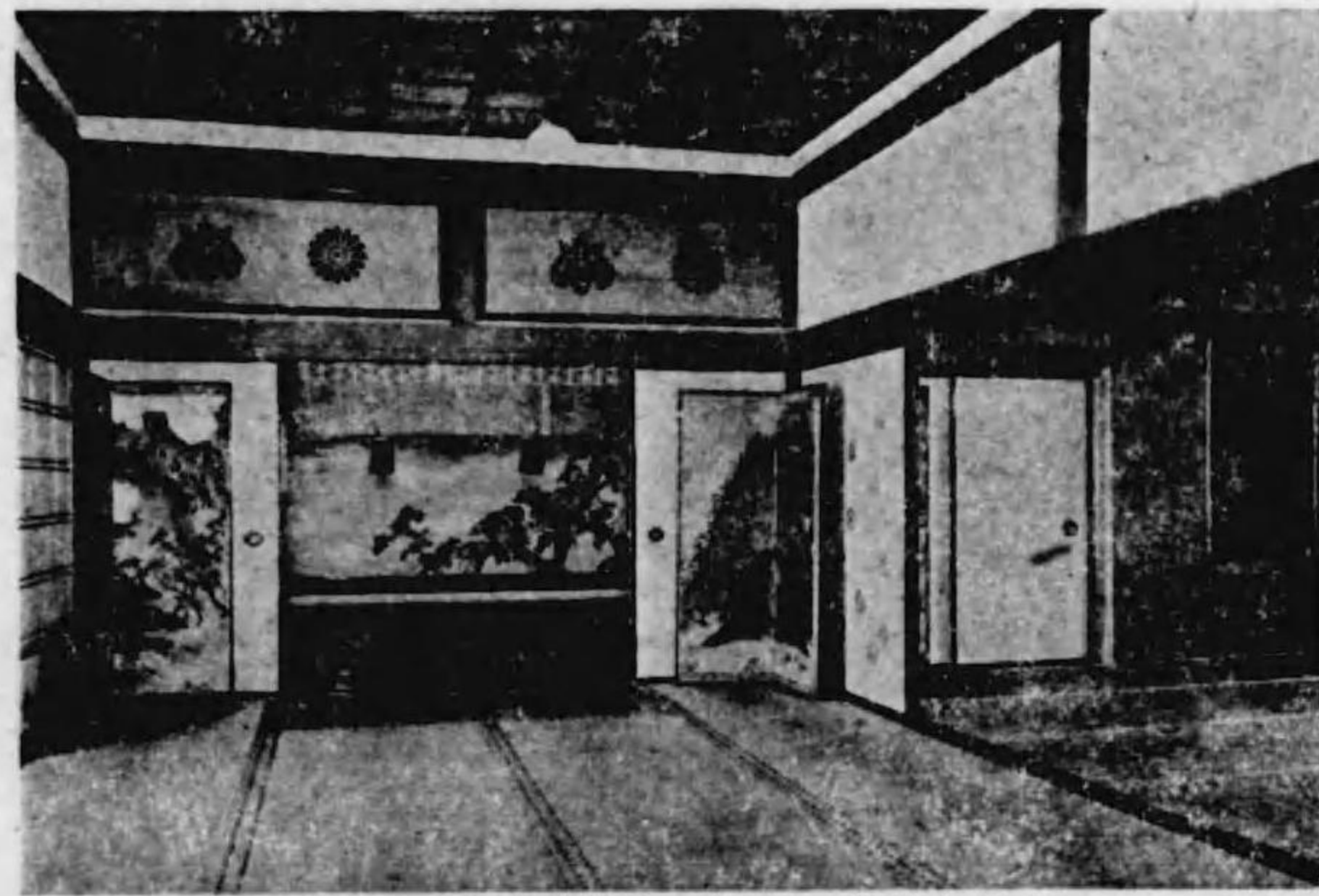
天野山金剛寺は觀心寺に續き御一行が親しく御巡拜せられ、又御同行の毛戸博士の御報告の如く、住職の曾我部老師より長々と詳しく説明をお聞きになつた趣であります



すが、定めし此の金剛寺が勤王護國之寺である由來のことや、楠公御自筆の文書一卷



河内天野山金剛寺天野殿



河内天野山金剛寺光嚴院並新御座所

即ち萌え出づる香氣高き楠公精神や、國家安泰の祈願の事などを充分御聞きになつたことと存じます其中に南朝、北朝が同時に同寺境内に行在所があつたこと

に就いて御尋ねがあつたとのことではありますが、それは尊氏の子の義詮の氣質が父尊氏及叔父直義と異り各所での行動が正反對に出づる場合が多かつた爲め、父及び叔父の邪魔になり、それ等の事情で尊氏が偽りて南朝に降参して一時南北朝を接近せしめた爲めとのことでありますが、尤も義詮と雖固より終始朝廷に心を寄せて居つたとは云へません。

(昨年このお話を致しました節は便宜上南北朝の名を申上げましたが今日では其の名稱の區別は根本的に用ひない筈であります。)

○小楠公の首塚

さて足利義詮に就いて義詮の異つた今一つの證據は、小楠公が正平三年正月五日二十三歳を一期として四條畷の花と散り、その首級が京都六條積に曝されてあつたのを夢窓圀師の高弟にして嵯峨寶篋院の中興の住職たる傑僧默庵禪師が、豫て小楠公の生前より死後の始末を依囑せられたる義を重んじ、この小楠公の首級を奪ひ來り之れを

法衣の袖に包み嵯峨に持歸り自分の住持する寺の裏庭に葬り、後に親交ある二代將軍足利義詮にこれを話しました處、義詮は父に肖ず小楠公の純忠義烈を欽慕して、自分



欽忠碑

の亡きあとは墳墓をこれと列べて葬れとの遺命がありましたからさてこそ彼の嵯峨野の寶篋院境内に小楠公の首塚と相並べて建てられてあります。同寺の境内にある「欽忠碑」には詳しきことが刻まれてあります。即ち一つの玉垣の内に見恩讐同塋の姿にて二つの墓が相並んで居りますが、其の實は右の如き義詮の遺言に基きたるもので全く其の心を同じくしたる同士が集つたのであります。其の玉垣に向つて右の石の扉には楠氏の菊水の紋所で左の扉には足利氏の丸に二ツ引の紋所になつて居ります。

寶篋院は、白河天皇の御開創にして以前は善入寺と稱しましたが二代將軍の法號を



小楠公首塚

取りて寺號に改稱したるものであります。寶篋院の假本堂は神戸の川崎芳太郎男が岐阜縣多治見町より明治天皇の行在所の御建物を乞ふて移されたものでありまして、又、同寺で發行されて居る「楠正成一卷書」は山鹿素行先生が秘藏せられ、先生の序文のある冊子であつて、六韜三略とも云ふべく、而して武人のみならず亦商家に移して以て範となすべく、

且つ大義名分は勿論齊家の道をも教へられ世道人心に裨益する所誠に尠からざる貴重なる一卷であります。この出版も亦川崎男の特志に出でたるものであります。

○四條畷及飯盛山の戦

此の四條畷の記事と小楠公の首塚の記事とは相前後致しますが、話の續合の都合であります。正平三年一月五日、四條畷の合戦は展開し、

賊將高師直は主力軍を以て野崎村に本陣を敷き、其の他は飯盛山に更に師泰隊は東條の本據を突かんとするの姿勢を取り、之に對し官軍は三軍を編成し、小楠公は弟正時、和田新發意以下を以て往生院に屯し、弟正儀には東條の本營を拒守せしめ、第二軍、第三軍は暗峠より北進せんとし、兩軍相見えたるは飯盛山下にして、正月五日ば有名なる四條畷の戦であります。師直と正行との合戦は數刻に及び激甚を極めたるも終に衆寡敵せず、正行、正時始め和田一族悉く戦死致しました。此戦の花々しき



四條畷神社

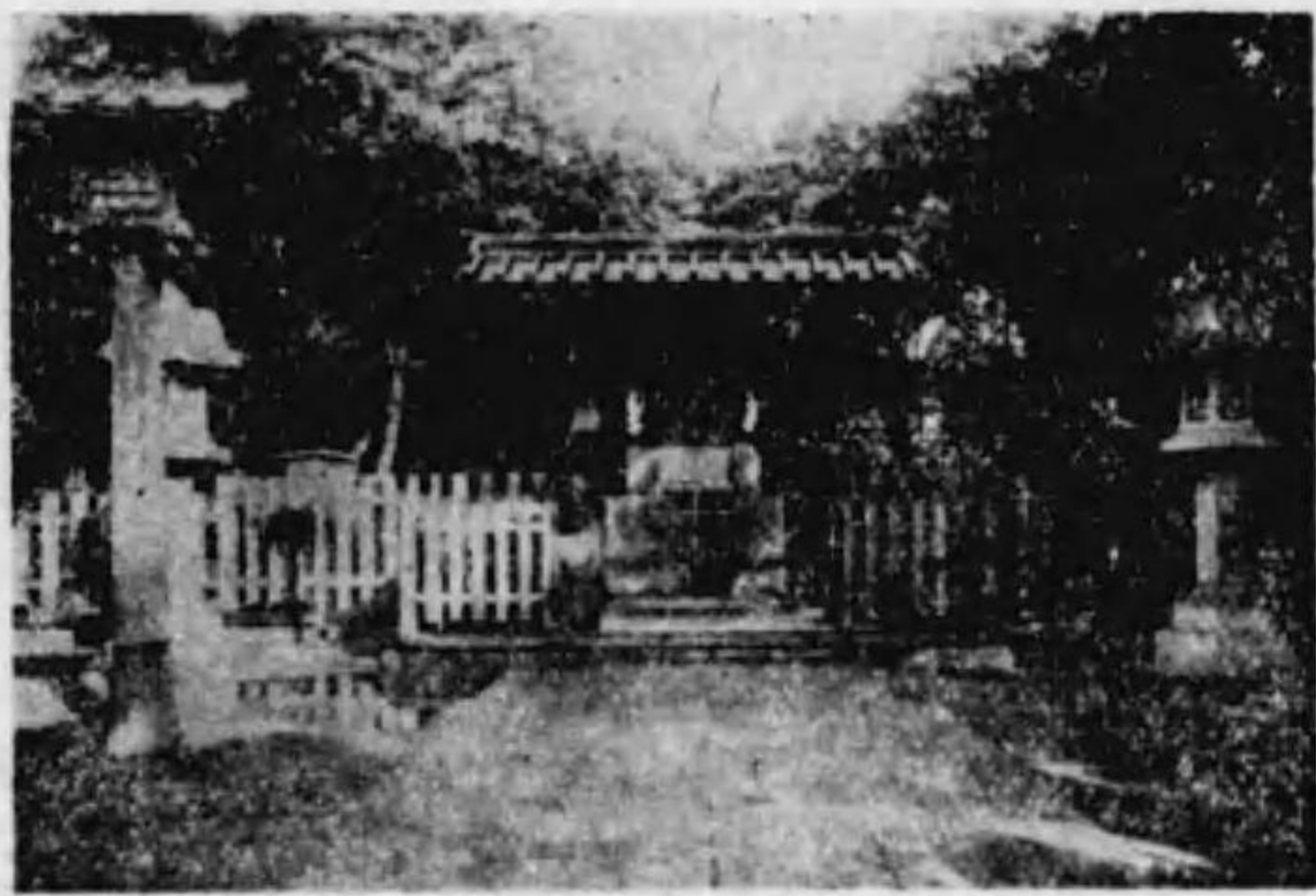
奮闘振は恰も湊川の奮闘振と其揆を一にし、克く父の遺芳を傳へ家名を揚げしは忠孝兩全と稱すべしであります。小楠公の英靈は別格官幣社四條畷神社として飯盛山麓に祭祀せられてあることは周知のことであります。

○吉野朝廷

吉野朝のことは別の機會に譲り今日は之に言及することを差控へます。

○大楠公の墓

夫れから湊川のことではありますが、是れは皆さん申上げずとも夙に充分御承知のことと存じますから之を省略し、只掻い摘んで申し上げますと、太閤秀吉が天下統一の後時の兵庫の奉行片桐且元をして楠公墓地を檢せしめ、ここに二十四坪を免税地と安めたのであります。其の後この墓地のある阪本村は、尼崎藩初代青山幸利侯の所領としての故を以て青山侯は輪塔を建て、之に松と梅とを植添へて印しとせられたるが始め



大楠公の墓

であります。但し延寶七年まで無名の塔でありましたが、その無名の塔でさへも當時の事情としては楠公の墓を建つるといふ事が徳川家に憚り既に餘程の決心が要りたる趣であります。其の後、尼崎の次の城主櫻井侯より年々燈籠を献納せられて居ります。青山侯より十四年を経て元祿五年即ち楠公歿後三百五十八年目に水戸黄門公に依つて「嗚呼忠臣楠子之墓」の墓碑を阪本村即ち神戸村に建てられたることは餘りに有名であります。右元祿五年より二十九年前の寛文四年の春、福岡の貝原益軒先生が此の湊川の墓に參詣せられたる時、墓は平田の中で碑もなく垣もなく只塋上松梅の二株あるのみで春蕪茫々の状を見て、こんな有様では今に分らなくなるとして更に建碑の企を立てられて既に石屋に碑文までお渡しになりましたが、其の後更に御考へ直しになり、斯る尊き方の御墓は自分の如き者は憚りありとて

無爲庵跡



遠慮せられたとの趣、益軒先生の「自娛録」中楠公墓記と云ふものに出て居ります。湊川神社境内の西北の隅に「無爲庵」と云ふのがありますが、これは俗に廣く楠寺と稱する廣嚴寺の子坊の一字にして楠氏一族橋本正員の母の建立せる庵にして楠公を始め弟の七郎左衛門尉正季以下七十餘人の自裁（正成公は四十三歳、正季卿は三十三歳）せられた舊跡でありまして一般に湊川神社に參詣さるる方の中には、この處を訪づれらるる方が少いやうであります。茲に一寸御參考迄に申上げて置きます。さて、湊川の碑の嗚呼の二字は何んとも云へぬ強き感じの起る感投詞であります。是は孔子が呉の季札の墓に「嗚呼有吳君子延陵之墓」と書かれたその文字より取られたるものと云はれて居ります。それは故事の出所を明らかにせられたる水戸公の用意のあることと察せられます。裏面の朱舜水の碑文は、こ

の時に作られたるものの様に多くの人々に思はれて居りますが、其の實は朱舜水はこの墓の建つ二十三年前に死なれて居ります。

○ 櫻井楠公父子訣別の畫。朱舜水の賛

一寸溯つて申し上げますと、前田綱紀公は加賀藩五代目前田綱紀侯即ち一般に松雲公と申しまして廣く知られて居る御方で、痴人のやうに鼻毛を長く延ばして居られ、人が笑ふと是で加賀百萬石の命を繋ぐとのお話のあつた有名なる名君であつて、その松雲公が水戸老公や會津の初代保科彈正公と共に御家柄が深き御縁續きであつて、そして孰れも楠公崇拜者でありました。その松雲公が二十八歳の若年の時、楠公訣兒の畫像を第一流の畫家に畫かせて保存せんとて、寛文十年四月京都の狩野探幽守信（六十九歳）を撰んで費用と時間とに頓着なく充分事實を調査せしめて之に畫かせ、之れが題賛を例の朱舜水に書かせ、朱舜水は七十一歳の時、之れを撰し且つ自書して後、天和二年即ち十一年目に死去してゐるのであります。其の後更に十三年目の元祿五年に

至り、光圀公六十五歳の時、彼の隠れもなき有名なる湊川の建碑があつた譯であります。而して右の賛は狩野探幽の畫に賛したものをそのまま轉用したものであります。但し「卒之以身許國之死靡佗」の十字の處が前後して居ります。夫れは水戸家に残つて居る未定稿の原稿があつて其の儘御使用になつた爲め前の如く圖上の本文とは相違があるとの趣であります。前に申述べました狩野探幽の楠公父子訣別の畫は、今や國寶として前田侯爵家に御所藏になつて居ります。因に江戸で當時の水戸邸と前田邸とは本郷と小石川との間で極く御近隣でありました。

○ 湊川大楠公の墓碑

楠公の建碑は徳川家を憚つてか光圀公御隠退後、而も建碑を擔當したるものは水戸家譜代の臣でなく元京都妙心寺の僧で後還俗して儒官として公に仕へ十竹齋と號した佐々助三郎宗淳、即ち黃門旅日記の助さん角さんの助さん其の人であります。墓石の用材は泉州石及白河石であります。書は岡村元春筆で顔眞卿流であります。碑蔭の朱

舜水の賛は二百八十六文字より成る非常なる名文で一字一句も苟もせず、一々故事を引用し頗る力あり魂を籠め眞に肺腑より出でたる名文であります。明國を救ふべく悲憤極りなき其の朱舜水が自らの境涯と合せて非常なる感激を持つた爲め一層振つたものであります。第一に忠孝を著はし、第二の天地に日月無くんばの文字は一層強く出でたるものでありまして、文體は破題法と申し恰も大刀を大上段に振翳したる自信強き血沸き肉躍るの文字なりと云はれて居ります。朱舜水は浙江省餘姚縣の人で、有名なる王陽明と所を同じくしてゐますが、明國を恢復すべく七度び長崎に來り日本に援兵を乞ひたるも幕府は



詮議中なりとて容易に決せず、彼の有名なる松平長七郎は、人も知る如く大志あり覇氣

満々たる紀州南龍公の内命を受けて救援の準備を整へて居られたのも中止となりました、それは一は明國の再起する見透しが立ち難きと、一は我國の財政上の關係からであつたと云はれて居ります。朱舜水は明國の恢復に對し熱烈に専念して居りましたのにも拘はらず事成らず、其の内、明國は亡びて雄心空しく天涯に去つて再び歸國するの機會を得る能はず、悲憤遣る方なく遂に筑後の柳河藩の儒臣安東省庵と云ふ人に身を寄せました。省庵は祿二百石の内、半を割いて與へて師事したのであります。朱舜水は、日本の三忠臣の傳、即ち平重盛、藤原藤房、楠正成の傳記を讀んで自分は支那第一の忠臣は文天祥や張世傑だと思つて居つたが、楠公の傳を讀むに及んで楠公の誠忠大義は、文天祥以上に優る忠臣なりとて大楠公を極力稱讃思慕するに至りました。而して其の後寛文五年水戸公に迎へられて客儒となりましたことは周知の事でありませぬ。朱舜水は天和二年四月、八十三歳を以て江戸に於て天命を全くせられました。

謁楠河州墳(拔萃)

頼山陽

北向再拜天日陰、七生人間滅此賊、碧血痕化五百歳、茫茫春蕪長大麥、

澁川大楠公の墓碑

君不見君臣相圖骨肉相吞、九葉十三世何所存、何如忠臣孝子萃一門、  
萬世之下一片石、留無數英雄之淚痕。

謁 楠 公 墓

眞 木 保 臣

廟階接樹晝冥々、上拜悚然松籟聲、  
嗚呼一片忠臣石、鎮得神州正氣精。

○ 櫻井驛 楠公父子訣別の地

其の楠公父子訣別の地たる櫻井の宿には、徳川家に憚つてか以前は誰も御世話もせず、只今より約百年前に頼山陽の名詩「山崎西に去れば櫻井の驛、楠公子に訣るる處林際東を指せば金剛山、堤樹依稀たり河内の路……」に依つて傳へられるのみでありました。今や楠公の誠忠は、素より父子訣別の話は洽く三尺の兒童も知つてゐますが、さて櫻井の聖地を訪づれた人は、恐らく大官名士の内でも極めて稀であつたであらうと思はれます。四條畷の役後、室町時代の二百年間は大義名分の教が衰へて楠公

は勅勘を蒙り賊子として取扱はれ 正親町天皇の御代永祿二年に至り萬里小路雅房卿を経て織田信孝、松永彈正久秀等の幹旋せる楠公十代目と稱する楠正虎の請を容れられ始めて楠公死後二百二十年後の勅勘が許された程で、是は一大變轉期であります。夫より引續き戰國時代に移り、随つて楠公に關する文獻は、或は湮滅せられ、或は北條、足利に對し後難を恐れて特に隱匿したる等に依り材料の乏しかりしも寧ろ當然かと存ぜられます。其の後、徳川時代に文學旺盛となりたるも史實を研究するものに至

つては案外少く、又政略上重壓を受けたる事情もありて、一層此の種の文獻に乏しく遺憾ながら只傳説を事實として信ずるの外ありませぬ。

攝津の國、三島郡島本村（後、島本町となる）字櫻井にある世に傳ふる櫻井の驛は、元



櫻井驛

櫻井の宿と稱したるを、彼の頼山陽が櫻井の驛として詠じたる詩が餘りに有名であり

ましたから、今は一般に傳へ呼ぶに遂に宿が驛と變りました。因に驛址の文字は文部省使用の驛趾に一定することと致しました。

櫻井の里

花を見し春をにしきの名残とて

木の葉色づく 櫻井の里

爲家

花散りて春はくれにし櫻井の

名にだにあかで 結ぶ頃かな

知家

散るは浮き散らぬは水に影うつす

春もおもしろき櫻井の里

西行

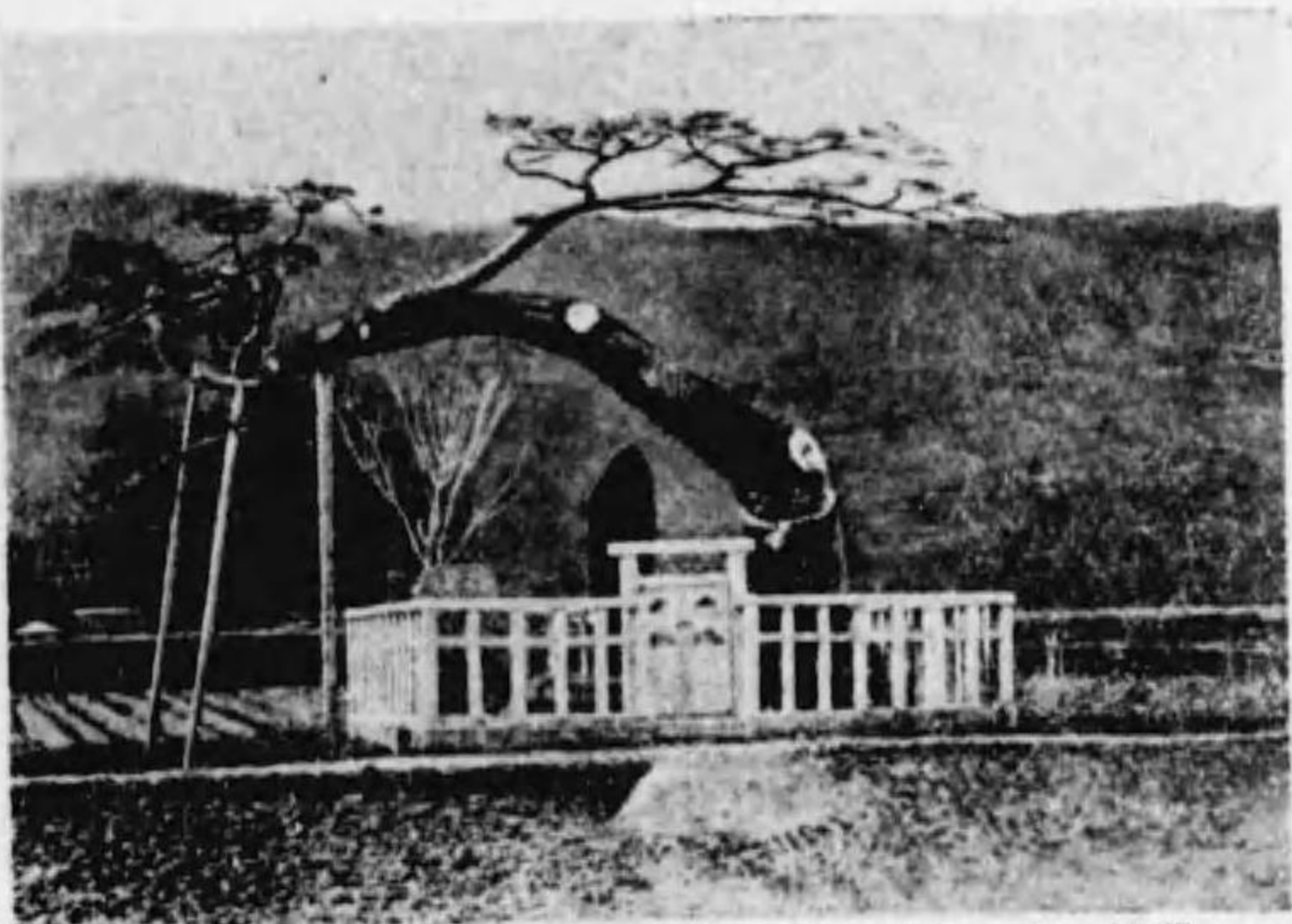
櫻井の驛址は今より約六百六年前、延元元年五月十六日楠公父子の訣別せられし所であります。即ち一は湊川を指し、一は河内を指して其の交叉點は恰も血涙を灑ぎ、身を以て「人」と云へる文字を大地に深く刻み込み、一片の義心を留めて尊皇護國の大

精神を永久に残されたる唯一の記念場所であります。其の邊は伊武勢の森、又小楠公が祈願の矢を奉納せられし坂口八幡社の跡もあります。一説には大楠公の參内上奏は五月二十日にして、櫻井の訣別は五月二十三日なりと申傳へて居ります。或は事實に合したる説かと思はれます。

此の處は西國街道(舊西國街道は山手に二筋あります)に沿ふた所で明治三十二、三年頃まで樹齡數百年、周圍一丈五尺餘の生ひ茂つた靈松があり譽れ高く、俚人古く傳へて「子別れの松」又は「旗立ての松」と呼んで居りました。所謂延元の昔、忠臣孝子泣いて菊水旗と共に見返り見送りつつ別れを惜まれし彼の慇懃なる庭訓の香ひ芳ばしき所であります。現にその松幹一片は今猶保存してあります。山陽先生の高弟高槻の藤井竹外先生の訣兒の松の短歌も傳つて居ります。楠公は櫻井の宿、殿居地の豪家にして名望家たる清水久治氏方に御滞在になつたと傳へて居ります。又小楠公の河内への歸途下馬、最後の別れの禮をせられました「馬降りの松」と稱する跡もあります。小楠公はここより高濱、楠葉の渡しに出で更に高野街道を経て千早に歸還せられました。



大楠公は建武以後攝、河、泉の太守として京都との往還には常に櫻井の宿に道を取り又ここにも宿泊せられたとの趣で、昔櫻井の宿は、この邊の中心地で相當繁盛の地でありましたが、山名、細川の亂に人家寺院等惜しくも兵災に罹り悉く烏有に歸しましたのであります。以上の關係よりして櫻井はさてこそ父子訣別に際しても小楠公を河内より櫻井の地に呼び寄せられましたことかと首肯されます。



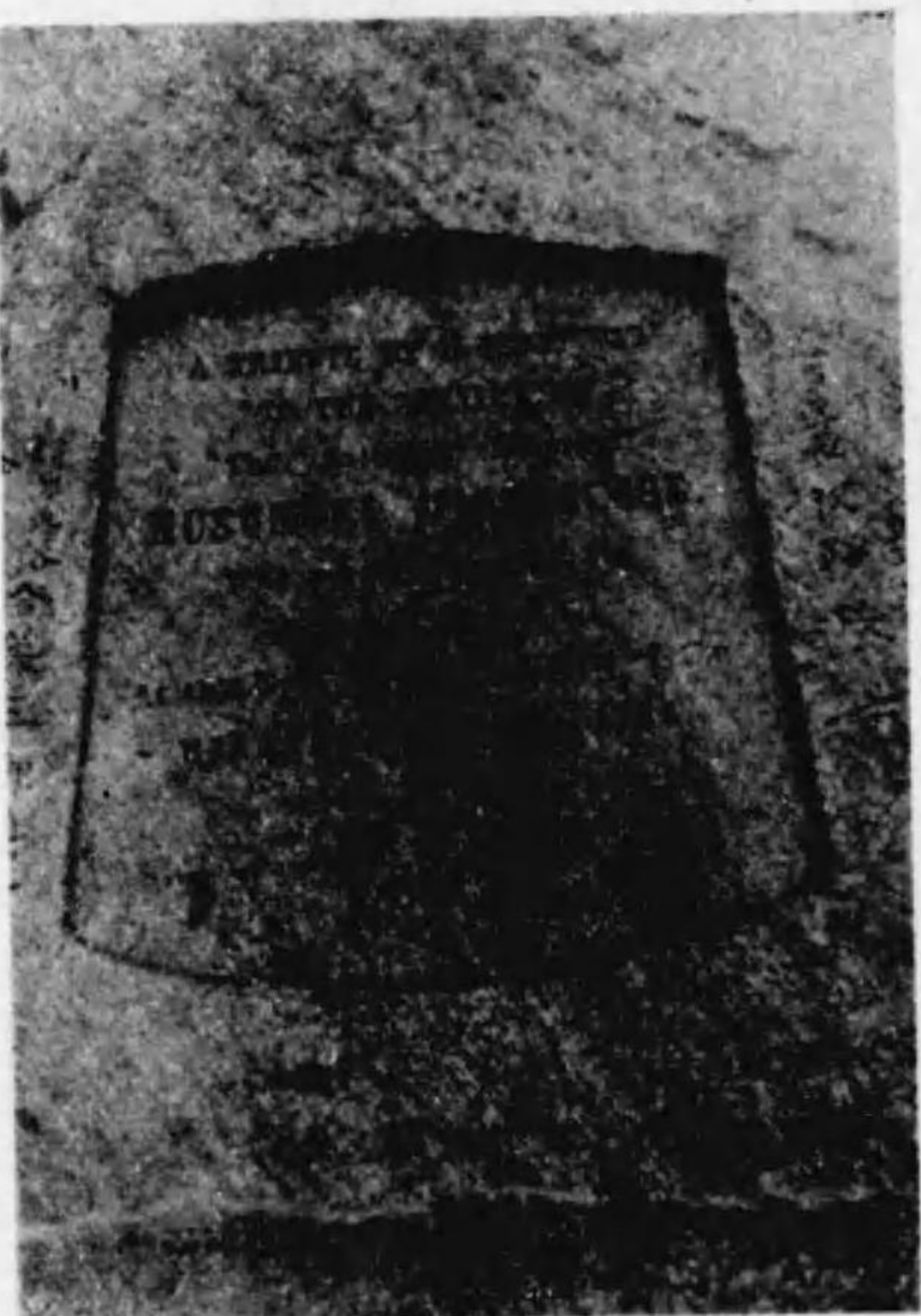
明治三十一年の頃櫻井驛陸 子別けの松並に記念碑  
(裏面は英國公使のステーク文)

訣子松短歌

櫻井驛攝津路、當路千年古松樹、  
支幹似指東與西、傳是楠公訣子處、  
如龍如虬鬱陰森、勿剪勿伐直至今、  
問汝老腹藏何物、依然猶有捧日之赤心、  
嗚呼乎君不見、南風不競北風起、  
此松怒號何時止。

○英國公使パークス氏楠公父子の忠誠に感じて建碑

明治九年外國人である英國公使ハリイ・パークス氏に依つて松蔭に十坪の地を撰び訣兒の記念碑が建てられ、茲に始めて遺蹟が世に顯はれた次第であります。即ち外國



パークス氏建碑の記念碑

を訪づれて楠公父子の忠節を説き、之れが教材に用ひられる等、イートン生活に多大

英國公使パークス氏楠公父子の忠誠に感じて建碑

の感化を與へた趣であります。由來、イートン・カレッヂは愛國の政治家及軍人の輩出したる學校であつて、世界大戰にもこの學校から盡忠報國の將兵を多數に出して居ることが自然パークス氏が此の楠公の碑を建てられたる因縁多かつたことかと思はれます。凡そ忠誠は真正にして東西の國境なしと存じます。

明治三十八、九年頃にはパークス氏の碑の玉垣も近邊の子供等の壞すが儘に放任して誰しも引き起すものもなかつたとは如何に科學思想に走りて一歴史を忘れ日本傳來の姿を顧みざることかと實に嘆かはしき次第と申すべきであります。明治三十九年畏くも聖代に遇ひ、明治天皇より子別れの御製を賜はり、東郷元帥の謹書せられたる碑があります。その裏面には小笠原子爵の題字があり、又元第四師團長林中將が山陽先生の詩を書せられて居ります。(昭和六年建立)

英國公使パークス碑文

譯文

勤王ノ士 楠正成卿ノ忠烈ニ對ス  
ル一外人ノ贈リモノ。卿ハ西曆千  
三百三十六年湊川ノ戰ノ前ニ此地  
ニ於テ吾子正行ト訣別セリ  
千八百七十六年十一月

駐日英國公使

ハーリー、エス、パークス

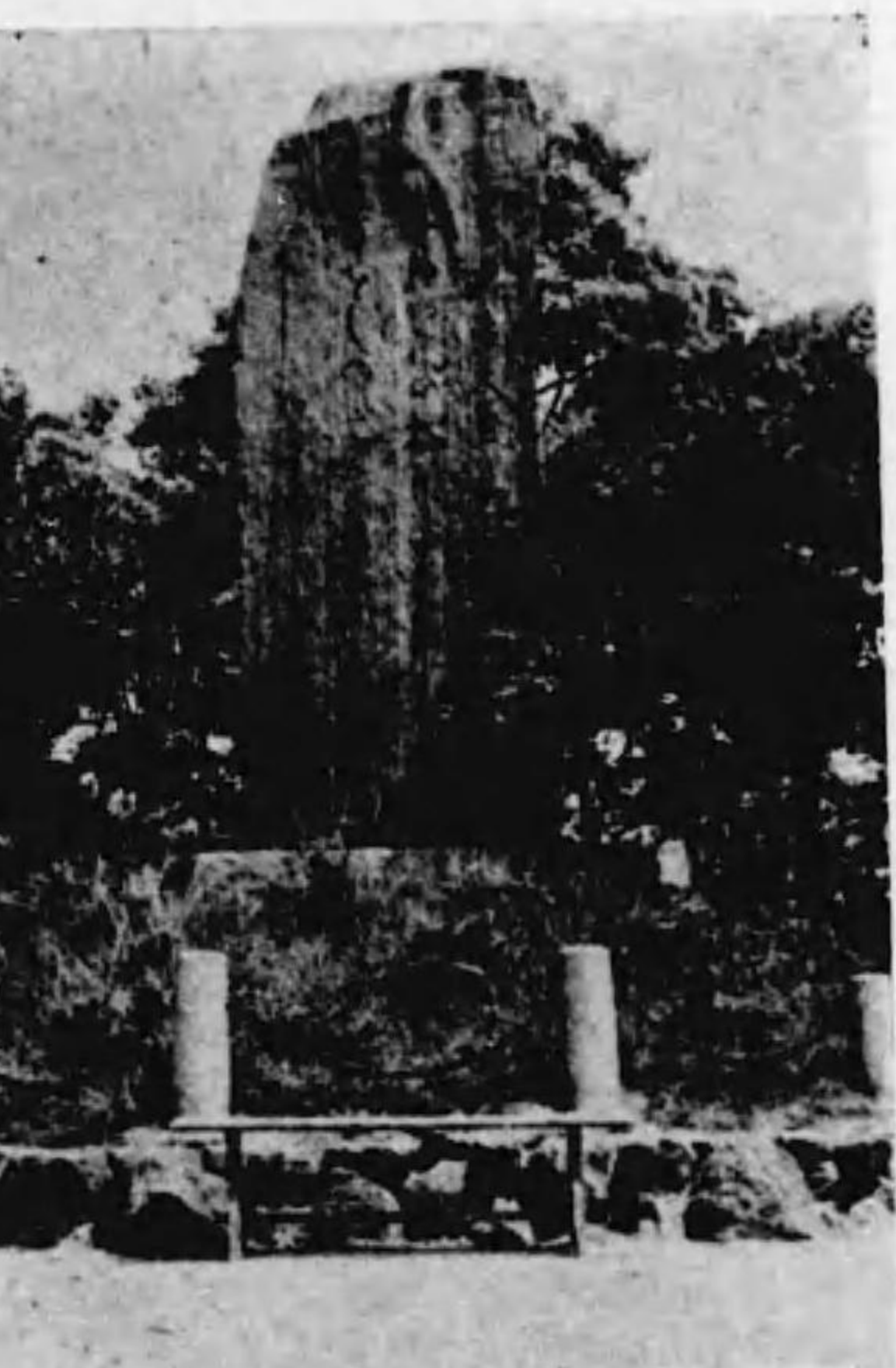
A TRIBUTE BY A FOREIGNER  
TO THE LOYALTY OF  
"The Faithful Retainer,"  
KUSUNOKI MASASHIGE,  
who parted from his son  
MASATSURA

At this spot before the Battle of the  
MINATOGAWA. A. D. 1336  
HARRY. S. PARKS.  
British minister to Japan.  
November. 1876.

御製

子わかれの松のしづくに袖ぬれて 昔をしのぶ さくらゐのさと  
昭憲皇太后の御歌に

櫻井のさとし忘れず君が爲 さかりもまたで 花のちりけむ



書謹帥元郷東 製御皇天治明

又乃木大将の書にて「楠公父子訣別之所」の碑があり、其の裏面には樞密顧問官細川潤次郎男の撰文があります。(明治四十五年建立)  
大正二年六月 閑院宮殿下御台臨あらせられ、樟樹を御手栽あらせられ又、久邇宮殿下の御手植の松があります。

彼の有名なる落合直文氏の

青葉茂れる櫻井の

里のわたりの夕まぐれ

木の下蔭に駒とめて

世の行末をつくづくと

しのぶ鎧の袖の上に

散るは涙かはた露か

父上いかにのたまふも

見すてまつりてわれ一人

如何で歸らむかへられむ

この正行は年こそは

未だ若けれもろ共に

御供つかへむ死出の旅

の唱歌は冷く涙と共に學童に唱はれて居るところであります。

英國公使パークス氏楠公父子の忠誠に感じて建碑



碑の「所之別訣子父公楠」

○ 櫻井驛趾の修理擴張

櫻井の驛趾には大楠公あり、小楠公あり延いて久子夫人も加はる、即ち忠、孝、貞の發源地であります。故に元來よりすれば、湊川と四條畷と櫻井の驛とは三者一體として忠孝節義を根基とせられ、護國の精神と國民教育の涵養、社會教化の淵源として所謂皇國精神上の主礎たるべきに拘はらず、獨り櫻井の驛趾に至つては何故か永く一般より顧みられざりしは甚だ遺憾とし且つ慨嘆に堪へざるところであります。頼山陽の所謂大鬼小鬼相臨んで哭するの意義最も深



記念館



(道參) 路道公楠

き大關係のある所であります。若しも百年前に山陽がこの櫻井の驛や、湊川を過ぎざりしせば日本外史の發奮悲憤延いては維新回天の大業の成就果して如何なりしか窃かに涙と共に想到せざるを得ません。私共一片耿々の情禁ぜず微力ながら同志奮然感起し相謀り昭和十二年春恰も支那事變勃發前頃より京阪神間及東京の有志者中の更に篤志家中の篤志家ともいふべき方々の眞の熱誠溢れ至情進るの心からなる協賛援助に依りて、此の狭少にして寂寥たる聖地の擴張修理に着手し、或る時は十坪、更に増して境域坪數千二百坪なりしを此度その約三

倍餘の三千八百九十坪に取擴げ、省線東海道線に沿ふて長さ百五十餘間の玉垣を設け又記念館兼修養道場を設置し、或は大いに樹木を植ゑて二三百年の後には鬱蒼たる森林たらしむる等一面森嚴と莊重とを考慮しつゝ大いに改修の計畫成り、之が一切を擧げて大阪府に依囑し、着々工事も進行中で特に新京阪線に向つて長さ四丁餘、幅員五間の參道(楠公道路と稱す)を設け、道の兩側に楠樹を植ゑて居ります。

又、新京阪線に「櫻井ノ驛」なる停留所をこの楠公道路際に新設せられ、停留所附近に一萬餘坪の公園を造り、名もゆかしき青葉公園と名づけ且つ運動場の設けも出來ました。話の最初に長々と申上げました 天皇御親政恢弘の祖たる官幣大社水無瀬神宮はここから七丁餘を隔てたる東南に在りて地理的、歴史的關係淺からず、又この邊り二千有餘年間の點々たる聖蹟、史蹟に加へて山川の自然美と相俟つて共に一帯の面目を一新され、歩いて天王山へと向つてハイキングコースに依れば、山崎及天王山の合戦や維新の志士眞木和泉守等十七人の忠死の跡、其他舊所名跡に富み幾多史實の研究材料及心身鍛鍊運動を兼ね、行樂に最も好適なる申分なき箇所であります。眞木

和泉守は無二の楠公崇拜者にして、其の著「何傷録」は最も楠公精神を欽仰したる有名なものであります。其の辭世に

大山の峰の岸根に埋めにけり

我が年月の日本魂

惜まれて玉と散る身はいさぎよし

瓦と共に世にあらんより

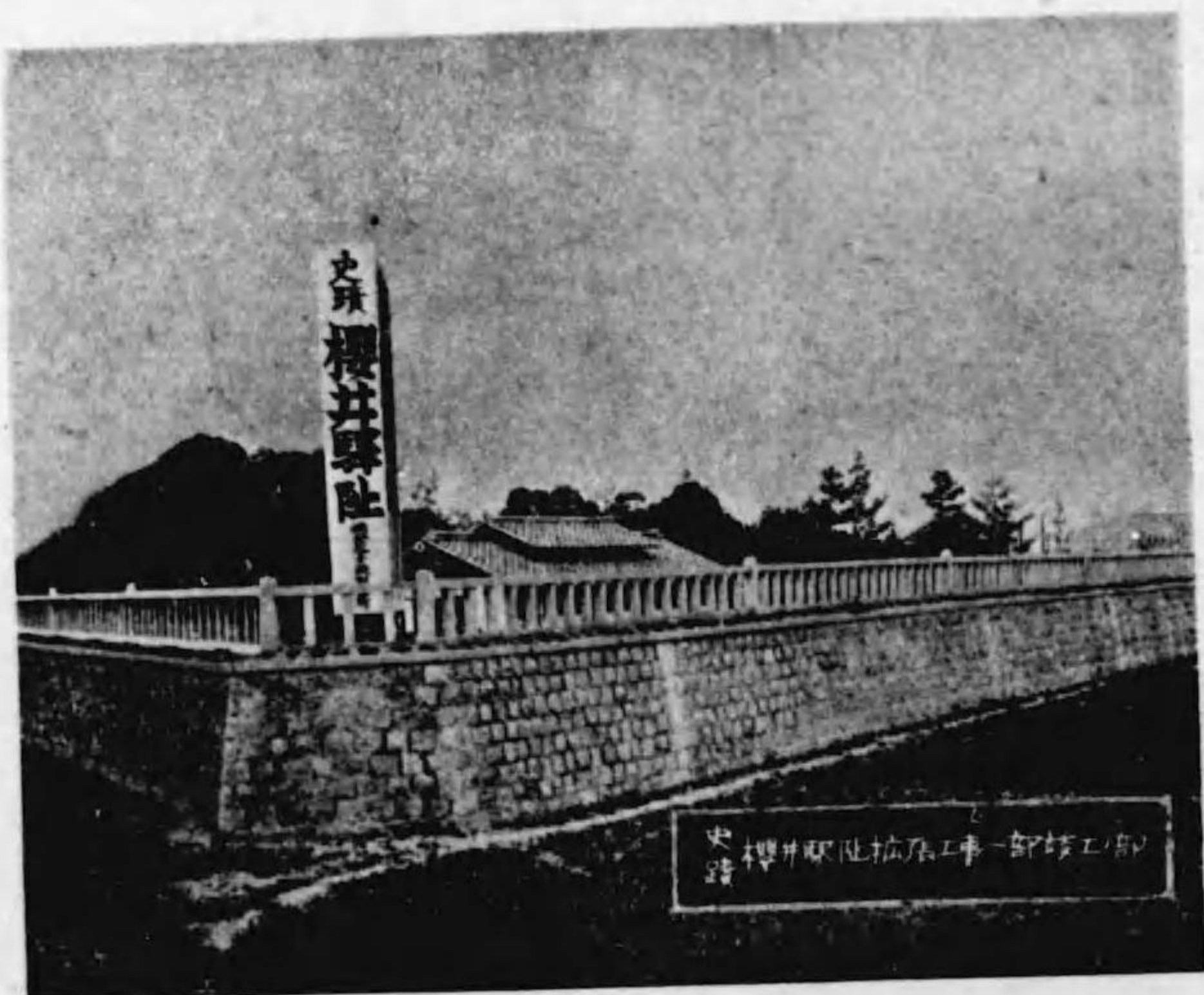
和泉守と志を同じくしたる愛國志士の辭世に

見よや人あらしの庭の紅葉葉は

何れ一葉もちらずやはある 平野國臣

ながらへて變らぬ月を見るよりも

死して掃はむ世々のうき雲 田中河内介



と共に楠公精神を實行したるものであります。

新京阪電鐵線に沿ふて幅員六間の産業大道開設工事中に在りて之れを連絡するこ  
ととなりますから、今後櫻井の驛趾の修理擴張工事が落成致しますれば、これを轉機  
として更に種々此の方面に適應はしき施設が行はれ、例へば青葉公園に楠公馬上の大  
銅像、郷軍の射撃場等此の邊一帶は變じて繁榮の地域となること疑なく、只爰に留意  
すべきことは周圍近邊の清雅を損せざることでありませう。今や東海道往復の汽車電車  
中より極めて明瞭に指呼せられ、日々幾千、幾萬を算する旅客、殊に最近二、三年間  
の如き出征の爲め勇躍して征途に就かるる數多の皇軍將士の如き、一入楠公父子の忠  
誠を長へに想起印象を深められ、現時上下盛んに唱道せらるる所謂滅私奉公の楠公精  
神、皇道精神を大々的に昂揚せらるることと深く信ずるのであります。尤も此の驛趾  
擴張のことたる若しも櫻井驛趾が昔時の舊態その儘の姿が依然残存してありしならば  
無論一切手を觸れざるに如くはなしと存じますが、如何にせん何百年の間種々變遷を  
經て場所さへ世間より忘れられ、動もすれば大和の櫻井と間違へらるる有様ゆゑ進

んで茲に擴張修理に着手したる次第であります。而も史蹟指定地は力めて之を尊重し  
中途設けたる建物は悉く取拂ひ移轉したのであります。

前にも申上ぐる如く私等有志相謀り、動もすれば繼子扱として忘れられんとする櫻  
井の驛趾たる聖地を修理して、先づ形より入りて内なる心を整はんとし、洽く世人に  
忠、孝、貞の淵源地を認識せしむるに努め、以て皇室中心の我が國體に基く日本精神  
即ち皇道精神を發揚喚起せしめんとする所以實に茲に存するのであります。蓋し忠、  
孝、貞は人倫の大本にして此の大本を同時に同一場所に於て天下に呼號宣揚し得るも  
のは恐らく櫻井を措いて他に類例の地なしと信ずるのであります。

この頃更に學校其他の有志により學童十一詣りが行はれ多數十一歳の男女相集り  
この櫻井の地に於て忠孝の道を修め忠良の臣民たらんことを心から堅く誓はるるに至  
り益々意義深く輝くこととなりました。

### 題楠公訣兒圖

篠崎小竹

西海戰塵迫、楠公軍務勞、雲愁櫻井驛、  
霜凜菊水刀、遺訓傳獅子、佳兒眞鳳毛、  
一家忠孝盡、萬古姓名高。

楠公別子圖

賴山陽

海甸陰風草木腥、史細特筆姓名馨、  
一腔熱血存餘瀝、分與兒曹灑賊庭、

櫻井驛

西鄉隆盛

殷懃遺訓淚盈顏、千載芳名在此間、  
花謝花開櫻井驛、幽香猶逗舊南山。

楠公訣子圖贊

木下順庵

維南有木、本支相同、義方承訓、勇烈匪躬、  
是父是子、克孝克忠、凜々生氣、千載仰風。

櫻井驛訣子圖

長三州

南朝命脈獨斯詩、決死貽謀事可悲、  
寒草殘烟櫻井驛、行人唯弔湊川碑、  
別るとも庭なにこしそ濁さじと

かたりあひけむ 櫻井のさと

大國隆正

もろともに散るをとどめし櫻井の

花の心の かぐはしき哉

三條實美

色も香もその枝ながらのこしけむ

吉野にほふ 櫻井のさと

平井隈山

櫻井のうまやに立ちて若き子に

をしへしまこと 繰り返し聞け

鹿持雅澄

君がため散れと教へておのれまづ

あらしに向ふ 櫻井の里

おやと子のわかれくるしきわかれ路を

わかれておなじ 道をふみける

君がため散るものころも櫻井の

花のかがみと 誰か仰がむ

撫子にかかるなみだや楠の露

櫻井が跡に宗長菊持参

獅子の子の中がへりけり雲の峰

言ひのこす言葉の端やさみたるる

野矢常方

福羽美静

税所敦子

芭蕉

召波

舉白

子規

○楠公の勤儉尙武勸農の撫育

按ずるに楠氏は累代河内國千早、赤阪、東條等七郷を支配する地頭職にして夙に勤王

の志厚く、正成公の父正遠は領民を愛撫し治を勵み家の子郎黨を扶助せらる。楠公は世に出でて僅か四年九ヶ月であります。幼より親しく難行苦行を積まれ、武に克く文に克く、又克く自治産業に、更に己れを持するに一汁一菜を以て満足して勤儉貯蓄に心を注がれたることが頗る厚かつたこととあります。支那の諸葛孔明は日本の楠公に比せらるる忠臣名將でありましたが、孔明は蜀の國にあつて農を勸めて民を養ひ、武を講じて士氣を勵まし、然る後に出でて魏と戦ひましたが、楠公も亦講武勸農を併せて力められました。河内の東條村は赤阪に隣りて楠氏の根據地でありましたが、先年大阪朝日新聞社で府下徴兵検査の成績優良なる町村を表彰しました時、東條村は第一位でありました。またこの村は村民が農事園藝等を勵みまして府下に於ける蜜柑の産出地として有名であります。これ等も亦楠氏の遺訓餘澤の今尚ほ存し、皇道産業とも申すべきかと存じます。又、高野豆腐も楠公の創められたものであります。之を以て見ましても楠公は政治と經濟とは疾くより不二のものとして併せ實行せられて居つたものと思はれます。斯様に大楠公は何れの方面より考へましても天晴れ聖賢の士とし



て治く欽仰せらるる方にして、日柳燕石の所謂「日本に聖人あり其の名を楠公と云ふ」とあり、又玄惠上人は「聖德太子以降賢德を稱すべきものは大楠公一人のみ」と評して居ります。如何に以て至誠の人にして、千古萬世仰いで純忠至誠の龜鑑となす偉大なる大人格者であるかを知るべきであります。御自作と傳へらるる歌に

身のために君を思ふもふた心

君が爲にと 身をば思はで

の一首があります。この一首だけでも楠公が皇室に對し奉る純忠の程が偲ばれるのであります。況んや公が「假りに君を怨み奉る心起りなば天照皇大神の御名を稱ふべし」と云へるが如き一點の私心なき崇高なる心事であつて、専心國家の安泰、大亂鎮定を祈る公の祈誓文と尊氏が家門の繁榮をのみ祈る私的の願文に比して其の無私念願の大實に霄壤の差ありと謂ふべきであります。

○大楠公の先見

楠公の戰略は外國にても現今見習ひ居れりとさへ傳へらるる如く、公は用兵の術に妙を得、攻守の着眼と云ひ、且つ智謀機略に長ずるのみならず、大阪城に立ちては天下の形勢を眺め、六十餘州の高所より達觀し、平素より用意周到にして各方面に腹心の者を派遣して情勢を探知せしめ、慧眼を以て能く大小の動靜を洞察し、曾て鎌倉に潜行して高時が政治を怠り驕奢に耽るの状を見て北條氏の末路の近づけるを知り窺かに期するところありたりとも傳へられて居ります。高時亡びて後、高氏が反覆常なく二期を懐くに及んで先見の明を以て能く其の人物を事前に看破し、或は近臣が英主の聖明を蔽ふを見て深く之を憂へ、或は尊氏、直義の兄弟が隙を生じ、或は直義が楠公を害せんとしたる時、或は尊氏が九州に下りたる時の如きその情勢を巨細に手に取るが如く知悉し、思を四方に馳せて臨機の計畧を講ぜる等深慮苦心の程實に察せられる次第であります。御承知の如く建武中興の大業成ると共に英邁に涉らせさせ給ふ後醍醐天皇は銳意御理想の實現に向つて御精勵遊ばされ

世治り民安かれと祈ること

我が身につつきぬ 思ひなりけれ

との有難き聖慮も惜い哉、武臣權勢を争ひ、公卿は早くも心弛緩し、其の内に尊氏の如き野心家は隙に乗じて朝廷に叛くに至り、世は再び暗黒となりました。然るに此の間に於て大楠公のみは獨り超然と一に回天の大義を念とし、専ら君國の爲に心を碎かれしことは尋常一様のことにあらずと深く々々察せらるるのであります。彼の藤原藤房卿は一夜楠公としてみじみ時世を語り合ひ

けふまではあればあるかの身もちて

夢の中にも 夢を見るかな

と古歌を詠みて愁然として泣かれ、又

住みすつる山を浮世の人訪はば

あらしや庭の松にこたへん

の一首を遺して飄然と世を捨て身を蹈晦せられ、續いて大塔宮には畏くも金枝玉葉の御身を以て御弑害の御不幸に御遭遇遊ばされ、其の後は南風競はず世は益々權勢に靡

くの習ひに傾き楠公は全く孤立となり、誰れ獨り力とし語るに人なく、三傑倒れて中興倒るの憾を懐かしめ、環境漸く寂寞となり悲哀を感じらるるを得ざるに至りました。

○楠公の心中感慨無量

ここに楠公は武人の本分として義を残して潔く屍を戰場に曝らすの最後の覺悟を京都を發する以前より疾に決せられたることは既に物語りに依つて明瞭であります。大楠公遺訓と傳ふる一節を見るに、今後足利氏を破る謀略は種々あれども、熟々時勢を大觀するに縱令尊氏を亡ぼすとも世は復たく武門政治となり、王政復古は容易に確立せず、之に對する治國平天下の道は唯第一に政を正しく行はせ給ふことが根本義なりとの意見を楠公は常に抱懷せられ居たることと思はれます。又今度の合戦は最後と決心したるものとして、小楠公への遺訓は申すまでもなく、部下に對し諄々と情理を込めて訓諭し、從騎肅として聽き皆涙を含む、斯くてその中に公は靜かに後事を和田、恩地、八尾、湯淺の四天王と呼ぶる宿將に託して三千二百餘人を河内に還へし、後世

義に感じて勤王の師起り、茲に始めて完全なる王政復古の時の到るを庶幾ふとて、御自身は軍人の本分を守りて命のままに従ひ、唯々として勅命を奉じて敢て背かず、七百騎の決死隊と共に決然一路従容として死地に赴かれたる、其の衷心の悲壯なる義に



福嚴寺

依つて成算なき覺悟の負け戦さに自ら投じ長き未來を期して現世を去らんと決心せられたる其の熱血と孤忠の感概無量さは何んと評すべきか、杜鵑の一聲も營ならず洵に名状すべからざる悲壯を越えたる場面とや云はんか、その心中恐らく天と楠公のみ知得せらるるのみと謂ふべきであります。世間或は之を指して楠公の犬死と譏るものもあるも大義は必ずしも今生一代にあらざることを示され、必敗萬死の無意義ならざることは後世に至り歴然争ふべからざる事實として現はれました。

建武元年六月二日兵庫福嚴寺に於て、後醍醐天皇に拜

謁の節「大義早速の功偏に汝の忠戦にあり」との有難き御言葉を賜はり感激に堪へず更に京都に御還幸の際、先驅を仰付けられたる面目は恐らく公が一生を通じて最も得意の最高峰であり、世に傳ふる馬上の銅像は即ちこの御奉迎の時の姿であります。爾後、漸次失意苦心の益々加はる時代に移り變りたるのみと察せられます。

梅は花多きを以て尊しとせず、香高きを以て尊しとす。而も香氣高きは克く霜雪を凌ぎ磐根錯節を克服するに依つて清香彌々高きを加ふるものであります。今も昔も權勢を争ひ、功名に馳せ、名譽利達を事とするは世の習ひなるに、大楠公は流石に吉野朝第一臣と稱せらるる通り毅然決然として皇室中心の國體の神聖と尊嚴とを奉じて誤らず、宗學に依つて鍛へられ、更に之れを日本的の忠孝



兵庫福嚴寺若官護國松祠

一本として君臣の大義を守りたる其の至純其の至誠終始一貫して去就極めて明らかにして、曾て利の爲に其の節を二三にせず、營に現世のみならず克く七生報國の赤誠を後世に残して、萬世不滅の範を事實に垂れ示されたる其の清節芳香は克く霜雪を凌ぎて泰然不撓不屈物ともせざるもの獨り楠公に於て之れを見るを得べく、恐らく世界歴史上比儔なき最高最大の眞に崇高なる理想の人格者、品格者と存じます。宜なり、笠置の行在所に於て「正成一人生きてありと聞召さば御運遂に開かせ給ふべし」と御答へ申上げたことは一兵衛尉の身として何たる大膽とや云はんか、是れ恐らく平生の修養の素地深きに基因し、其の大信念の初より磐石の如く、金鐵の如く力強く固まり居り、何人も犯すべからず、其の生涯を通じ又父子兄弟を通じて終始一貫せる烈々たる其の忠節は天下第一人者として敬ひ仰ぎ慕はるる所以であります。足利系の書物梅松論にも楠公の死は敵ではあるが實に惜しい、正成の如き偉いものはないと書いてあり、又太平記にも「敵も味方も惜しまぬ人ぞなかりける」と結んであります。如何に以て楠公を知るべきかと存ぜられます。

楠公五百年忌辰

藤田東湖

大厦誰知一木支、中興成否繫南枝、  
勤王義結金剛壘、逆賊膽寒菊水旗、  
還闕復當豺虎徑、鞠躬無奈廣堂機、  
空餘千古誠忠氣、凜烈長爲百世師。

湊川懷古

有馬頼永

三過忠臣楠子墓、對公默誓我精神、  
一言欲述延元事、憤意塞胸淚滿襟。

詠大楠公

成田松坡

七生殲賊意何深、忠節無雙貫古今、  
應有威靈長護國、萬人齊仰大楠心。

## 湊川に詣でて

阪本龍馬

月と日のむかしを忍ぶみたと川

ながれてきよき 菊のしたみづ

世に不世出の人出でて不世出の人を知ると云へる如く楠公は頼山陽出でて山陽も亦日本外史の楠公讚論篇に依つて世に出で、この不世出の人を能く知り兩々相待つて光を放ちたる所以のものは何れも無二の尊皇精神に燃えたからであることは申すまでもありません。

彼の山陽の超越せる高邁なる卓見を以て公を絶對的理想の忠誠の國士と斷定し、感慨熱烈の意氣と天稟の健筆とを以て成れる先生の表忠史は、陰に陽に志ある者をして心飛び魂躍り、覺えず神秘を感じしむるものにして、この山陽の大文章は眞に一大偉觀を放ち永く永く後世に感化を與へたるものと謂ふべきであります。

山陽先生に先だち熱烈なる尊皇家であり、楠公崇拜者として聞ゆる者は、山崎闇齋、

淺見綱齋、望楠軒、若林強齋の諸先生があります。綱齋先生は靖獻遺言の著者として有名なるのみならず、楠公を崇拜したる「その時正成肌の守を取出し、これは一年都攻ありし時、下し給へる論旨なり云々」の軍歌あり、尙又謠曲「楠露」「正成」「櫻井」の一篇ありて千載の世に教へんとしたる筆端能く主觀境を開作して萬斛の同情を此の忠孝の靈能に捧げ聴く者、讀む者をして悽烈の感あらしめ、廣く藉々として人口に膾炙し痛く人心を鼓舞したるものであります。由來謠曲は悠閑の者の餘技の如く解せらるるも決して然らず、之に依りて人心を緩和、善導上資するところ多大なるものと存じ、一知半解者の妄を開く爲に一言附け加へて置きます。

今や六百餘年の後、楠公精神益々光り輝き遺芳愈々香ばしく、維新回天の鴻業も之れに基き大成したるものと稱せられ益々世に景仰追慕せられて居ります。楠公は何れかと申せば寡黙の方にして名利名聞を求めず、身上に關し固より宣傳せらるることなく随つて傳記類の何等録するものなく、只専ら自分の實踐躬行上に立派に範を遺されたるのみであります。それが理論でなく、形の上でなく、無言の實行と言へる尊き

教であつて其の眞精神が後世に至り嘖々として敬仰思慕せられて居るのであります。又古來歴史上英雄忠臣決して少なからざるも恐らく楠公ほど多くの和歌、詩文を以て永く崇敬禮讃止まざるものは、實は一人の感化克く古今東西を通じて琴線に觸れたるが故にして餘芳綿々として、斯くの如く偉大なるものは殆んど他に類例なしと存じます。凡そ天下の事は人に依つて起り人に由つて成る。即ち其の烈々たる精神は世を経ると共に楠公を慕ふや彌々切なるものあり、苟も櫻井の史蹟を訪づれ、此の地を過ぐる者沁々と痛く心の奥底をば刺され、心ある者も心なき者までも誰か潸然涙を催し轉た纏々の情禁せず、低徊願望去る能はざるものなからんやであります。現に今や我國は未曾有の事變に當面し且つ世界の風雲雷ならざるの時（此の筆の終らざるの中早くも今は既に第二の歐洲戦争に入り更に又世界戦争の兆も多分見受けられます）に方り天地神明に誓ひ、萬人共に心から信賴し得る誠忠無比、義勇公に奉ずるの崇高なる犠牲心、斷行力の強き、而も大器にして肚あり、勇あり、博識にして大手腕ある眞の責任を荷ふて立つ毅然たる大人物を求むるや切且急なりであります。彼の領土の野心もな

く賠償金も求めず、所謂身を殺して仁を爲すの大犠牲を拂ひ求めざるの心を以て平和を求むる眞の東亞の新秩序建設と云ふ大理想も、果して世界が我が公正高遠なる日本精神の眞髓を能く理解するや、將た理解せしむるや否や、又其の彼等の襟度如何は日出づる皇國と夜の星を戴く彼の國とは悉く反對にして、彼等の觀念の本質より見て私は頗る疑問と致して居りますが、纏て世界の秩序建設問題も當然起ることと存じます。女神の平和に偽あるか太平洋は浪荒くして纏て全世界を動亂せしむる危険日々に高まりつつあるは如何。宜しく米國自ら再三再四猛省すべきところにあらずやと米國の爲に惜むものであります。ここに至らば皇國の任愈々重且大なりと謂ふべく、何れにしても眞の秩序ある平和は何んと申しても誠即ち正義に歸一するのであります。要するに以上の目的達成如何は一に懸つて人の意氣、魂の問題にして所謂爲せば成るのであります。

○楠公觀

一天萬乘の大君の御爲には身を鴻毛の輕きに置き、或は湊川の露と消え、或は四條



小楠公之墓

人英雄を生み、之れが原動力となり、遂に維新の大業となり以て國體を富嶽の安きに

啜の花と散りたるも、思へば櫻井の父子訣別は單に子別れの悲しみといふよりも寧ろ此の一粒が百倍萬倍となりて或は櫻井の驛に、或は河内觀心寺内中院の持佛堂に凜乎たる訓戒が意義深く根ざしてその大精神は幾百年の後に至りても脈々として盡きず、芳んばしき花が咲き、實を結び、幾多の志士仁

守護し奉りたるものにして其の遺蹟、其の遺訓は實に尊き偉大なる感化力となり、世道人心を萬古の下に維持したる國の至寶であります、豈萬世の下一片の石とのみ云はんやであります。又銃後の護りに就いても大楠公夫人は婦人の儀表と稱せらるる通り良妻賢母にして、即ち育つるあり、教ゆるあり、守るあり而も楠公の家庭は表は頗る嚴格にして秋霜烈日の如きも、内は温乎として和氣霽靄團欒の樂ありと、斯くの如き美はしき楠氏一族にして始めて忠孝の譽れ高く、又楠公はこの夫人ありてこそ後顧の憂なく、安んじて死に就かれたるを思へば共に之れ一體の同一境地にして合せて燦然光を放つものであります。



楠妣庵

大楠公遺訓の中に事毎に母に談ずべからずとの一語があります、洵に味ふべき言にして婦人は賢にして黙々賢を賢とし表に現はさざる其

の 高き處、奥深き處が眞の賢にして所謂奥様といふ内助貞淑が婦徳として尊きものであると存じます。昔より牝鶏の晨するは往々大本を謬まる例ありとて古人は戒めて居ります。久子夫人の如きは家庭の婦人としては弱く母としては強く剛柔兼備と稱せられ、眞に婦人の美德であり、典型であると存じます。

詠 楠 氏

三 島 毅

父忠子孝母貞賢、 實踐如斯人道全、  
男學楠公女楠氏、 不用教書千萬編。

楠 公 夫 人

成 田 松 坡

楠家忠烈有淵源、 内助功勞人所尊、  
千載明々遺德炳、 母儀型範照乾坤。

同

東久世通禧

萬代に光くもらぬます鏡

あきらけき世の 影てらすらむ

更に繰返して申せば、彼の父は正成一人生きてあらばと誓ひ、子は櫻井の庭訓を貫かんが爲め一生の死時と死場所を求め、三男は父の忠も兄の孝をも捨てて賊名に甘んじて顧みず、一に尊き皇統を護り通し貫き、夫人は常に夫人として貞節を守り、又母として婦道の鑑となられたのであります。斯くも類ひなき一族、揃ひも揃ふて一滴の血も一塊の肉も王事に捧げて節に殉じ、忠臣孝子悉く一門に萃る。其の誠忠大義の一貫せることは實に偉大なる皇道精神の顯現と存じます。

東郷元帥の歌に

花はみな吹雪と散りぬ吉野山

老木若木の わかちなくして

又乃木大將の歌に

根も幹も枝ものこらずくちはてし

楠の薫の たかくもあるかな



世間或は楠公の戦死に就いて説を挿み、大楠公は湊川より狩り逃げて河内に歸へり天壽を全くせりと云ひ、或は櫻井の子別れは小説なりと誣ゆるものがありますも、是等は無智無學の徒輩か又は爲にする者の妄説にして毫も齒牙に懸くるに足らず、之は歴然たる疑なき事實であります。楠公の犠牲的精神は千秋萬古に輝く生きたる日本精神にして其の一貫したる大精神こそ到る處澎湃として生氣潑刺と勃興せる所以にして即ち正しく七生報國に對する大なる顯彰と言ふべく、實に尊嚴なる皇國の國體の守護神にして雄々しき大和心の眞姿の發露であり、天業恢弘の本として確乎たる大思想大信念に立てる天下の大道即ち皇道であります。皇道は霸道と異り、弘く世界の人類を匡濟せんとする人の人たる行くべき信と仁愛との道にして自然に發し、自然に行ひ決して偽善的、作意的、自己的、功利的のものにあらずと存じます。

由來、皇道は儒教、佛教、キリスト教を包容して渾然一體となしたる上に、超然と日本古來の家族制の國家たる大和魂より發するものであります。茲に於て 神武天皇御創業の御經綸の如く、亦皇道精神、世界精神ともなり、八紘一字の御理想たる大御

心に副ひ奉ることとなるのであります。恐らく世界萬國より眺むれば、凡ゆる角度より見て日本ほど美しくは光輝ある歴史を有する偉大なる民族、純然たる公平無私、正義道德の最高の國、君臣一體を以て超然卓立せる國は外には絶對にありません。所謂萬邦無比であります。即ち何人も儼乎として模すべからず犯すべからざる絶大の權威ある眞の「誠の國」であるからであります。誠は宇宙萬有の自然の生成化育の眞理であり、人道の根本にして實に中外に施す治國平天下の要道であります。現時の如く世界に中立らしき中立國なく、萬邦協和成らず、人類は正しき生活を得る能はず、大愛平和は單に名のみに止まり、其の實、國際公法も信義もなく、對立激化、狡替排他、鬭爭略奪、弱肉強食、不信不義、無誠意の惡魔の世と化して底止するところなく、遂に疲れ果て、全く自壞の非行が行詰り此の世界が若しも驟然打開一新するの時ありとすれば、恐らく次に來るものは唯一なる我が神ながらの國、即ち「誠の國」正義道德の最高の國が當然統治に當らせられ、治く皇徳が四海に光被することと確信致します。即ち世界の皇道化であり、本然の眞姿であります。仁義深き皇徳は宏大無邊にして自

然と一致一元となり、高く廣く必ずや世界億兆の各其の處を得て齊しく仰ぎ慕ふところにして、所謂眞善眞美の大御心の現るることあります。結局は道德的の再武装を以て東西を通じて各人が痛く反省し、互に敬愛尊重し、個人的我慾を去り眞に大我大乘的となりて始めて所謂四海兄弟ともなり、以て克く世界の文明、萬邦の協和を保持し人類の安寧福祉を増進せらるるのであります。要するに口に唱ふるばかりでなく、眞に己れを無にせざれば我執の横行であります。思へよ、我が國を誘導したる先進國の互に有無相通ずる大我的の通商貿易は今日は果して如何でありませうか、全く排他主義に豹變したのではありませんか、彼等の心底今更ながら淺ましく、而も今日の如く世界平和の愛好者に對し頻に迫害挑戦を仕向くるならば、平和は假面にして彼こそ初より打算に長じ、友愛の情なく、侵略の野望を事とする豺狼であつたのではありませんか、此の豺狼の前に立つ獅子王は誰でありませうか。更に思へよ、從來支那の動亂と云ひ、日支、日露の戦争と云ひ、其の原由するところは悉く皇國の照魔鏡に反映したるものにあらざるか、英米も亦爰に三思猛省の要ありと謂ふべく、正義の前には

彼等も遂に屈服するは當然であり、所謂天網恢々疎にして漏らさざるものか。同時に我國も亦深く思を善處に致さざるべからずと存じます。

古來日本は神祖よりの清明なる至誠に基き、天の道、神の道即ち皇道を行ふのであります。皇道は古來傳統の遺訓にして經濟濟民を旨とし、公益も私益も自然に一致せる健全なる立派な日本的の國家社會を保ち來りたる權威あるものにして、何處までも一視同仁の大御心に發するものであると存ぜられます。歐洲の國家觀念は僅々五百年位なるに、我皇國は二千六百年來光輝ある傳統的大和魂を以て臨んで居ります。聞くならく高千穗朝時代は地球の大半を我が日本が掌握したりしにあらずやとも云はれて居ります。降つて我元祿年間は文化燎亂時代と云はるるに反し當時の外國の有様は如何がでありましたでせうか。互に争鬪をこれ事とし殊にアメリカの如きは固より影形も無き有様であつたと思ひます。只惜むらくは其の後我が幕府は通商貿易の統制の道を失ひ守成に専念して大勢を顧みず、識見淺くして鎖國政治を行ひたる爲海外進取の發展が遅延阻害せられたることは洵に返すくも遺憾に存じます。更に安政の開港は

米英露の脅迫に依り已むなく倉邊應諾したるものにして何等の準備の暇もなく實に實に遺憾の至りに堪へません。凡そ外交は最初に強く出るを要とするのみならず、先んずれば人を制すであります。私共幾度か拜誦しまして胸を痛く打つことは明治元年三月十四日御宣布し給りたる五箇條の御誓文であります。實に堂々たる大文字、宏遠なる大御理想であると拜感して居ります。

熟々世界の形勢を大觀するに、日々刻々變化し、惡化し或は急轉して大動亂を來さんやも測り知り難く、思へば此の大變轉機こそ我に取りて天の與ふる賜にして寧ろ自ら進んで取るべきにあらずやと考へられます。恐らく此の賜は平素堅持する道義基調の國、即ち「誠の國」こそ獨り之れを享受するの特權あり、天來の聲かと存じます。時は再び來らず、大日本帝國の臣民たるもの須らく眼を大にし強く廣く智を磨き遠大なる計畫の下に一大覺悟なくして可ならんであります。況んや我國は時に多少の消長ありと雖、悠久にして且つ興隆の一方的の厚徳の國であります。併し斯く精神的道德を説く其の前に抽象的よりも歐米の表面的理論、裏面的欺瞞事實の兩建の交錯、英米

の提携、制海權、制空權の分岐、グアム、シンガポールの防備乃至ソ聯の大陸關係等國防國家の體制上、幾多複雑せる事實があり之等の推移に隨ふて考慮處理すべき大問題が横たはり居ります。又、今日は單に精神的或は武力的の外に廣義の經濟戰即ち無血戰があります。即ち物心併せ行ふ必要があります。茲に於てか更に眼を轉じて天下の大局大勢を達觀することを須臾も忽諸に付してはならぬことは勿論、更に國內に於いては大事を前にして國民益々一心一體となり、互に相信賴し、眞に心から赤誠を披瀝して強く一般に透徹したる感激を與へ、深く自ら反省改善に努め、以て國力の振興伸展を謀らねばならぬと存じます。

○ 誠

心は天よりも大なりと云へるが如く、世界は廣く萬國多しと雖、如何なる場合に於ても誠の心即ち公平正義に打ち勝つものは絶対にないと確信するのであります。故に正を以て臨み直を以て對するは永遠不變の勝利であります。兵法に曰く戰に勝つは名

正しきを以て第一とす。と其の名正しく目的確かに正々堂々自ら省みて直くんば千萬人と雖吾れ往かんの大猛心の氣慨ある旗印こそ上大將より下兵士に至るまで一貫透徹して國民一體となり、令せず號せずして心から自ら進んで眞に協力一致以て目的完遂に向つて迷はず戦ふのであります。況んや經濟戰、思想戰の如き協心戮力其の他百般の事業に於ても總親和を以て總能力を發揮善用し、一家一國全體の繁榮否自他共榮を謀るの本は矢張り正義即ち誠であり、治國平天下の要諦は道德が根本であります。而して是れ天地を通じて不動不變の鐵則であります。

國民道德の精神は皇軍に在つては軍人精神であり、明治天皇の軍人に賜つた五箇條の勅諭の精神は畢竟するに「誠心」であります。心誠ならざれば如何なる嘉言善行も裝飾に過ぎずして何の役に立たずと仰せられて居る通であります。政治も經濟も人も誠が徹底さへすれば必ず融通無碍で解決するものであります。彼の法律は利心の理論辯護にあらずして人間の人間たる信義道德の道に外ならずして、信は力なり、終始誠一貫たるべきであります。因果應報は結局歸するところに歸するのであります。

忠臣と孝子とは昭々の爲に節をのべず。冥々の爲に行を惰らず、所謂天知る地知る神知る、我知るなりであつて、偽なきに對する誠は大なり。人の知らぬ内に誠ありてこそ尊く所謂至誠天に通ずであり、至誠動かざること無しであります。

なき名ぞと人にはいひてありなまし

心のとばばいかがこたへん

天地萬物と共に呼吸し、潮の差引と共に生死し、時至らば芽を發し花開き實を結ぶ其の實は即ち誠であります。日月四季の循環するは是れ自然の法則にして、人も亦不言の自然に従ふべく、自然は實に誠の本體であります。

大學に曰く、其の心を正しくせんと欲するものは先づ其の意を誠にす。内に誠あれば外に形はる。中庸に曰く、誠なるものは物の終始にして誠成らずんば物なし、と。由來我國は左傾せず右傾せず黨せず偏せず中道に立ち道を修め生を樂み、飽くまで中正を守るべきでありまして、即ち誠であり、所謂天衣無縫無始無終とは此の事であります。この中庸をして均しく其の程度を高むることが誠に叶ひ又健實であります。東

洋道徳は心を本とし、西洋道徳は物を本とするに比して遙かに我の優越せることは論なき所と信じます。我國にては國土も國家も一となり、更に言へば宇宙觀も國家觀も人生觀も皆一體であります。況んや東洋は種々天恵に豊かなる國柄でありますから彼の猶太系の侵害式とは大いに觀念を異にする所以と存じます。誠あれば禮あり、敬あり、愛あり、讓あり、秩序あり、平和成るのであります。要するに誠の右に出づるものは何物も斷じてありません。繰返して言ふ、人を動かし天を動かすものは實に至誠であります。老子の言へる如く「智慧出でて大偽あり」であつてはなりません。然るに世界と云はず國內と云はず目前の事象に捉はれ大本を忘れて只自分の爲に御都合主義を是れ事とするに汲々たるは人間の行くべき眞の誠に背反するものと謂ふべく、この傾向は眞に末恐ろしきにあらずやと存ぜられます。

彼の四書五經の經典も國學も西洋の哲學も之を綜合大觀すれば我が神國古來傳道の誠に歸一するものにして天行健にして不易であり、天地宇宙を主宰するものは誠の一宇に外ならず。故に誠に順ふものは榮え、誠に逆ふものは衰ふるのであります。

## 明治天皇の御製に

目に見えぬ神の心に通ふこそ

人の心の 誠なりけれ

鬼神も泣かすものは世の中の

人の心の 誠なりけり

## 古歌に

天地の如何なる國の果までも

尊きものは 誠なりけり

八百の嘘を上手に並べても

誠一つに かなはざりけり

## 菅公の御歌に

誠

心だに誠の道にかないなば

祈らずとも 神や守るらむ

とありまして神が喜んで受入れて下さる真心即ち表裏のない眞の誠でなければなりません。此の眞の誠が神に通じ、萬民の心を引付けるのであります。此の誠なる本が立てば自ら世を助け人を救ふことになります。故に我々は皇國の臣民として莊嚴なる國體の本義に基き其の精華を明彩に發揮し、國家本位に坐して日本人たるの本然を守りて誤らず、根本は他にかぶれず、模擬を戒め創造に励め、飽くまで自主獨往を以て本義とし、加ふるに科學其の他の長を彼に取り、世界の社會の眞相を咀嚼しつつ、而して我は眞に良心に満ちたる頼母しき日本人として忠良なる勇ましく逞ましく健氣なる丈夫を以て自任し、立派に世に生き立派に世に役立ち、人の中にも人と呼ばれる天晴れ國家の材となり器となることを期せねばならぬ。興亞の新秩序建設といふも畢竟文化を高め國力伸展に努め以て内治、外交、國防の強化を期せねばなりません。茲に於てか先づ人を造るべく、精神的に道德的に情操的に科學的に肉體的に訓練に耐ふる強健

にして清新潑刺たる確かに實ある教育の大本に向つて一意邁進することが肝要であります。今日高度國防國家を高唱するも、第一に人的要素を要し、其の本は教育の振興に在りと信じます。獨逸の例に徴するも洵に明かであります。

されば 明治天皇の賜はつた勅諭に、「軍國多事の際と雖教育の事は忽にすべからず」と。仰せられて居ります。

國を思ふ道に二つは無かりけり

軍のにはに 立つも立たぬも

楠正行は十一歳にして父正成より忠孝の道を訓へられ之を實行したのであります。今後の教育は單に學齡に達し居る爲にあらざして眞に人間たらしむべく鍛鍊の爲須らく皇道に基き生きたる日本魂の學問を學童に向つて授け、且つ幼時よりして此の志を強く立てしめ長じて之を實行する立派なる忠良の臣民たらしむべく薰育しなければならぬと存じます。志は本なり、本立つて末自ら定るであります。志立つは所謂學既に成るであります。十一は士であり、士の心は志であり、十一ノ子は孝であり、中心と

なれば即ち是が忠であります。深く思はざるべけんやであります。人間の根本の教養を誤り急造の極端なる思想の走るに任せ徒らに時の流行に捲き込まれるやうなことがあつては洵に由々しき結果を招來するものと憂慮するのであります。願くは確つかりと固く地に着けよであります。即ち何學何教であても何々主義であつても古來の日本の神ながらの大道たる本源を堅く把握して迷はず、誤らず之を廣く包容して日本化、皇道化、誠化となすべきであります。

皇太后陛下の御歌に

異國のいかなる教入り來りても

とかすがやがて 大御國振

○楠公の人生觀

要するに大楠公の所謂人生觀として唱へらるる所信は、非、理、法、權、天の旗印に外ならず。即ち權は法を制するも天に勝たず、所謂天定つて人に勝つであつて、天

ほど公明正大なるものはなく。大西郷の敬天の信仰もこの天を畏るることであり、宮本武藏は神を頼むな敬えと申しました。人の至誠至眞が信心でありますから、人に信心があれば、其の人の心を通じて神は直ちに人を助け國を護らせ給ふものと信じます。故に金も名も命も要らぬこととなります。換言すれば人生は唯天に随つて正を行ひ不動の精神を以て死を恐れず。敢然大死一番死に切る覺悟が肝要であります。或は大楠公の死は大死である、何故生き永へて幾度も最後まで後途を畫せざるか斯く死を急いだのは獨り己れを清くせんとするもので決して死に場所を得たものでない、是は日本人の長所であり、亦短所であると難ずる人もありますが、歴史の一面のみを見て速断せず、當時の天下の形勢、人心の向背、四圍の境涯の事情、楠公の善處すべき立場、心理心中等を篤と忖度考察して眞諦を判断すべきであります。況んや楠公は既に實戦には幾度か試練済であり、是より宋學の大義名分を實行して後世に範を垂れ、永く人心を振起せしめんとする宿志を示す好機なりと信ぜられたからであると察せられます。抑々楠公は透徹せる眼を以て時勢を達觀し事後に於ける大勢の推移を豫見し義

を千載に残して現世を去り、罪業深き妄念なれども七度び生き替り生き替り、飽くまで朝敵を亡さんとの最後の一言は確乎不動の大信念にして何等の不平もなく、愆念もなく迷ひもなく更に毀譽褒貶も意に介せず自己の爲に期するところ一點も見出し得ず、生死超脱し大義に殉じたる其の高潔至純なる只皇基を護るあるのみにして、此の至誠純忠の眞髓が他に超越して後世に長く感化を與へたるものにして、公の志の深大に至つては燕雀の測り知る能はざる處にして何んぞ大死とや言はん、洵に文武雙美の正死と謂ふべしであります。さればこそ子孫の血統は絶ゆることありとも楠公精神は永生不滅にして脈々と繼承せられ、後世に躍如として永く世道人心を指導維持せられ益々意義深く光り輝くのであります。即ち楠公の死は死に依て尊皇思想が奮勃と甦り萬人等しく尊敬崇拜して止まざる所以であります。尙楠公兄弟の最後の問答を見るに佛教の心得は充分持ちながら斷然神ながらの皇道精神に立ちて迷はず、人間自らの大義に依つて解脱を求むる點が明瞭に我等に示唆せられたるものと存ぜられ益々其の人格の偉大なるに畏敬思慕せらるるのであります。

### ○百鍊一死の覺悟

更に重ねて死に就て申せば曾て大久保利通公が英國公使パークスとの談判に於て机の上にピストルを置き談判破裂の時の自殺の用意を示されたれば同公使は忽ち公の要求に唯々として應諾したることありと。即ち萬事死である、竹内式部、吉田松陰、眞木和泉守、田中河内介、山縣大貳、藤井右門、宮部鼎藏、平野國臣、吉村寅太郎、橋本左内、梅田雲濱、頼三樹の如き何れも懸命に死を賭して國事に盡されたる國士であります。三條公、岩倉公は申すに及ばず大久保、西郷、木戸の諸公は眞に憂國の士にして誠心誠意身を擲ちて御輔佐を申上げ、又副島伯、山岡子、高崎男、元田男の如きも深く自ら死を心に誓ひ、全く命懸けで御近侍申上げられたものとのことであります。西郷隆盛と山岡鐵舟とは將に江戸を焦土に化せしめんとするを救ひ、百萬の生靈を生かし以て大にしては皇國を安泰に置かしめたるは全く右兩雄が赤心と赤心とが一體を成し、共に死を誓ひたる眞に大丈夫の誠より出でたるものであります。伊藤公が陸奥



宗光伯を外務大臣に起用せらるるや伯は病を冒し死を決して奮然治外法權撤廢の衝に當り、僅々八ヶ月を以て成就しせしめ、時偶々日清戰爭の起るや實に最後の死を決して事に當り、其の跡始末まで赤誠以てその責任を全くせられたるにあらざるやでありませぬ。彼の小村公使の支那入りの決心も小村外務大臣の跡始末の爲のポーツマウス行の決心も全く死の覺悟であり、到底薄志弱行者の及ぶところではありません。故に死の覺悟さへあらば天下何事か成らざらんやであつて、徒らに人に求めず、神に倚らず、只々頼むべきは自己を信するの力であり、自分の責任感であります。自分の心膽さへ強固にして毅然と定まれば、神も來れば佛も來り外敵何んぞ恐れんやであります。茲に前途洋々燦然として「光は東方より」の文字通り實現することは疑なしと信じます。彼の八紘一字の根本精神は皇孫正を養ふの心を弘め、然る後にと宣ふた通りで、道を造るには正が第一義であります。又五ヶ條の御誓文に對する奉答文の一節に「臣等謹而聖旨を奉體し死を誓ひ勤勉從事冀くは以て宸襟を安んじ奉つらむ」とあります。實に死は人間の終りであり、死は成否の鍵であります。彼の佐賀縣には、舊藩以來有名

なる葉隱論語なるものありて、君の爲、國の爲には武士は死を以て武士道の第一義とし、毎日死する覺悟を鍊るべしと説いてあります。況して職責上責任を感じては割腹して申開きをなすを例と致します。此の葉隱論語は楠公精神を骨子としたるものにて佐賀藩では夙に楠公を崇拜し、寛文三年神社を建て楠公祭を行ふて居ります。之が日本に於ける最初の御祭とのことであります。楠公は常に十死一生を説いて居られます。白隱禪師も明極禪師も皆死の大活現成を説かれて居ります。元來人間は刻々生れ刻々死するのである、故に死に徹し生に徹すれば所謂死中に生を得るのであります。是れは日本武士道の示教であります。而して日本武士道とは大義名分を辨へ、文武を勵み、高潔にして節操を尊び、率先して己を空しくして範を垂れ、禮儀を重んじ事に當つては身を挺し、命を惜まず其の平生の覺悟を發揮する等、要するに上に立ちて智仁勇即ち誠の範を示すものにして人の人たり臣の臣たる道に外ならず、故に現時の如く士、農、工、商の差別なく一般齊しく各其の職域を守りて國民の本分を盡すべき時代より云へば畢竟國民道德と云ふ事に歸一するのであり利己的、個人的には永久に眞

の繁榮無きことは斷じて疑ありません。

今日、日本は縦令金力なく、智力なしとしても、神ながらの大和魂なる唯一の寶を有つて居ります。其の魂を強く活かすには結局一に懸つて人の問題、更に言ひ返せば精神の問題矢張り魂の問題如何に存する次第であります。この根本の正義と一死以て之に當るの大覺悟を行ふ心構が力強く確固と定まれば自信も立ち指導も正しく明らか強く行はれ、天地は自ら明朗清新となり人心安定し國民舉つて不惑不動志氣旺盛、元氣潑刺たりであります。彼の獨逸ヒットラー總統と英國チエンバレン首相との死の覺悟の差異は如何でありませうか。これは必ずしも精銳の新武器の力のみならず實に軍、官、民が上下の別なく老若男女の差なく晝夜を分たず悉くが一致和合して一體となり一舉一動整然として紊れず犯さず、愛國の至情に燃へ、自主獨往の氣魄ある努力と而して其の上に驚くべき強き適正なる統制力を實行する人傑が存するに原由することと深く痛感する次第であります。即ち身を捨つる死の覺悟が眞に人に迫まり、その徹底さ如何が自ら人をして感奮興起せしめ、此の氣概ありて此の實現こそ眞に一國の

運命を決定するものであります。凡そ天下の事は準備あり、熟慮の後堅き信念の下に斷行を要し、死を誓ひて事に當るに在りと存じます。要するに國家の柱石たり一世の輿望を荷ふものは鐵石の意思、不動不拔の大抱負、大經綸を以て臨み死を以て卒先果敢事に當るの大覺悟なかるべからずと存じます。其の大覺悟あり大責任を荷ふ人は一人が其の衝に當るべきものと存じます。夫れは一人なればこそ一人と云ふ字を合せて大の字となるのであります。今や方に悠久皇紀二千六百年の千載一遇の聖典を迎ふるの時、至誠に燃えて起つた我忠勇無比の皇軍は楠公精神を紹述繼承して、一億一心聖戰の目的貫徹に邁進し、以て曠古の大業を達成するものと堅く信じて疑なしと存じます。さもあれ、神州正氣のあるところ必ず天祐冥助ありであります。

明治天皇御製

萬民こころあはせて守るなる

國に立つ身ぞ 嬉しかりける

## ○楠公の人と爲り

最後に繰返して申し上げます。大楠公は文武兩道に勝れたる人、特に聖賢の道に通じ智謀秀で且つ仁と勇とを兼ね備へたる信義の人、功に誇らず威を立てざる高韵大度の人、大義名分を正し神皇正統の國體を明徴實行したる人、敬神崇祖に厚き人、機略に長じ而も權謀術數を排斥したる人、仁慈大愛に富み、後世に教を垂れたる人、信仰に厚く求道の人、心身一如の鍛錬に自ら鞭ちたる人、楠公父子は忠孝兩全を實行したる人、滅私奉公の念強く清く正しき人、天業翼賛恢弘に一貫の人、七生報國の魂の人而も産業を奨励開發し日常生活の安定に即して率先實行の範を示したる人、即ち平生より物心兩様の準備を爲したる人、恩威並び行ひたる人、赤十字社的の博愛の人であります。抑々楠公は幼時よりの修業鍛錬振と云ひ、長じて領内の牧民指導の善政振と云ひ、笠置に於て大命を拜し王事に奉じたる以來の活動振と云ひ、京都に於て輦轂の下に仕へたる奉公振と云ひ、必勝の建策も用ひられず而して一度び出陣の大命下るや唯々と

して維れ命維れ従ひ何等不満不平を漏らさざる其の武人の服従振と云ひ、死を決して後事を宿將に託するの用意周到なる跡始末振と云ひ、將來に對する兒の採るべき道への慇懃なる教訓振と云ひ、湊川に於ける逆戦法を用ひたる深き用意ある沈勇振と云ひ最後の有らん限りの花々しき寧ろ物凄き力戦奮闘振と云ひ、大義に殉じて遠き未來を期し身を以て七生報國を誓ひて現世を去らんとする主上に酬ひ奉る其の眞精神振と云ひ、洵に用意周到至れり盡せりであります。

以上を総合すれば我々は悉く眞に心から臣子として、又人としての龜鑑と仰ぎ肝に銘して景仰思慕措く能はざる處であります。實に楠公は殉國の巖であり奉公の礎にして天地の大道に随ひ人道の極致を實行して大義臣道を實踐したる完成の人、否權化と謂ふべきであります。嗚呼大楠公は死すべき時に潔く死し、天を怨まず人を咎めず仁を求めて仁を得たる其の純忠は國體に契合して正位正統の皇統を擁護し奉り、猶今人をして自ら流涕一身に沁み、而して夫れより更に精神上に於て生の境涯として克く後世に永く護國の神として指導啓發せしめられた洵に偉大なる尊き方であります。是れ

全く文武兩道の修養深きに基因するものとして後人の宜しく學ぶべき所なりと信じます。豈一片の捨石椽の下の力持ちに終らんやであります。思ふに維新の志士は悉く楠公崇拜者にして至誠を本とし愛國の熱情に富める命懸けの健士であり、又目前に驅られず長いく目を以て遠く達觀し何百年後を期して克く現世に犠牲となられたる方々であります。彼の幕末に當り冲天決河の猛偉力を以て尊皇の思想を激成し、其の推進力となりたるものは實に楠公精神の發露であり敬仰措く能はざる所であります。今人の忍苦沈勇の眞意氣果して如何。

### ○楠公崇拜者

楠公精神は徳川中葉に於て漸く勃興し來り、幕末に於て最も高潮に達したりと云ふべく而して尊皇思想の樞軸となり、楠公を崇拜し、楠公精神を實踐發揚し、回天の聖業を扶翼し奉りたる志士は文章家としては頼山陽を第一に擧ぐべく、一藩を擧げて楠公精神に傾倒せしめたものは水戸學を起したる水戸光圀公を推すべく、藤田東湖、山

崎闇齋、淺見綱齋、山鹿素行其他各藩に於ても例せば薩州の島津公、長州の毛利公、肥州の鍋島公、土州の山内公、久留米の有馬公、石州の龜井公等の楠公を崇拜し或は毎年楠公祭祀を恒例とせらるる等有名にして擧げて數ふべからずの有様であります。志士の内でも西郷南洲、大久保甲東、久保之正、木戸松菊、副島種臣、吉田松陰、平野國臣、阪本龍馬、有村新七、大國隆正、福羽美靜、眞木保臣、宮部鼎藏、佐久良東雄、平井隈山等最も世に稱揚せられて居ります。

### ○島本村の奉仕

今日は楠公史蹟巡りのハイキングに伴ふお話を致すが題目でありましたが、之に關聯して、當村に對する希望をも付け加へさして頂きます。

この櫻井の驛趾が修理擴張の後は島本村の純眞なる學童に依つて此の地は清く掃除され、箒目正しく落葉なく、又手洗水は常に地の底より滾々として清冽なる清水が噴き上るやうに致度く、斯ることは小事に似て實は此の地を訪づれる者をして漫ろに心

氣清新となり、邪心を去らしめ、且つ襟を正して敬神崇祖の念を起さしむるに與つて其の效大なりと信じます。而して此の村出身の人々は願はくば常に思を楠公に馳せ高潔にして利己自我を去り、滅私奉公の念厚く、仁愛親切の心に富み、天地に感謝報恩の誠を致すと同時に清く直く正義を守り、神明に誓つて恥ぢざる良心に基き永く、名譽の實を矜持せられ、奮つて第一の模範町村たらんことを失禮ながら此の機會に附け加へて皆様に御願ひ申上げて置く次第であります。私は更に之れを押し擴めて申せば、獨り島本村に限らず、攝、河、泉を通じて日本全國に此の氣持を洽く廣く傳へたいものと希望して已まざる所あります。以上は恐らく水無瀬神宮と櫻井の史蹟との二つの誇を持つ此の村の光榮と義務とであると存じます。

### ○最後の所感

抑々我が國は神勅を奉じ、皇室中心の國體の本義に基き、聖德太子の十七憲法、明治天皇の欽定憲法、國民訓として至れり盡せりの教育勅語に則り、忠孝一本の皇道

精神を宣揚するは今更申すまでもなく、而して今後世界列國の關係複雑多端を加へ、時局愈々重大性を加ふるの際、天地の大道に立ち、信義道德を基本とし人間生活に即應して我が教育を益々向上せしめ、活眼を以て視野を廣大にし見地を高くして世界の軍事、外交、政治、經濟、文化を通じて大勢の動向を靜かに達觀し、感謝と希望とに滿ち而も氣宇宏大に人物彌々高く、堅忍持久と確固不拔の氣魄ある大國民の本領の上に打つて一丸となり、眞に偽りなき東洋永遠の平和の確立、人類の福祉の爲に雄渾遠大なる國家百年の長計たる新秩序の建設を圖るは萬世一系の天皇を戴ける光榮ある我が國民に課せられたる一大使命にして之を實踐してこそ眞に臣道の誠を竭すことにあらずやと考へます。何んぞ科學萬能の近代戦と叫ばんやであります。而して天地は悠久であり死生天に在り、心は我に在り、即ち尊きは金にあらず、物にあらず、人の心こそ眞に中軸中核であります。而して心確かなれば國家の意思目的明確牢固にして安泰であります。茲に於て平素修養を積み、知識を廣く世界に求め、學を弘め魂を磨き、肚を練り以て眞の逞しく健氣なる人間となる心構が第一義であります。而して平生周到

なる不斷の準備と努力とを怠らず實力と能力活用とに基き生きたる誠を發揮すると同時に一面何事も最後の大解決は時の到來と斷の一字とに在りと存じます。古人言はずや斷じて行へば鬼神も之を避くと至言と謂ふべきであります。

大楠公の上御一人に對し奉る脈々たる精忠の大精神は奕々として燦然日月を貫くのみならず、皇國の史上を飾りたる美果であり、過去、現世、未來の臣子の龜鑑であります。仰ぎ見る楠公、生ける楠公は千載不磨の教を傳へて曰く「人は心身を鍛錬すると共に正義に立脚して、智能を磨くに在り」と、是れぞ魂の基本たる智仁勇の三徳の原則に由る洵に尊き大至言と謂ふべしであります。豊太閤は皇室を尊重し、楠公を崇拜し應仁以來麻の如き亂世の後を承けて國內を統一するや更に海外に壯圖を實現し、半途長逝に依りて已なく中止したのであります。即ち家を顧みず、身を思はず大抱負を以て我が尊き大國家をして海外に飛躍伸展せしめ進んで更に世界を統一せんとの雄壯なる宏圖大望を志したるものであります。尤も朝鮮征伐は多くの人命を失ひ、多大の軍費を費やし何等の結果を得ずとの非難あるも國威を海外に宣揚し士氣を鼓舞したる

功績は測り知るべからずであります。唯惜むらくは國內に生じたる或る出來事にして是等は爲政者の最も注意戒愼すべき點であり内治まり護りあれば國固しであります。熟らく古き當時の躍動振を追想すれば、克く機に乗じて事を起し、機を見て事を止め、機を察して事を轉ず、今日は右手で戦争するかと思へば明日は早くも左手で外交手腕を揮ひ克く機先を制するの有様であります。即ち自由自在に目的と手段とを誤らず巧妙に、機敏に、周到に、大膽に行ふて居ります。然るに今の外交家、經世家たるもの何んぞ太閤に及ばざるの甚しきやと叫びたいのであります。

由來我が日本は四面海を環らすの國として水利を利用し、海國男兒の面目として又指南車として力を外に又南に發展せしむべきことは古來傳統的と信じて可なるにあらざやと思ひます。是は必ずしも黒潮の血が交ると否とに論なく所謂海を制するものは世界を制すと、況んや現時世界列國の情勢如何實に寒心に堪へざるにあらざやであります。申すまでもなく我が國は民意の上に唯 天皇御一人のみが統治し給ふ國家にして、臣民が大御心に副ひ奉り一に臣道實踐の誠を竭して皇運を扶翼し 天皇をして

天皇たらしめ奉るには畢竟するに國民の熱誠なる眞の官民一體の協力の意氣如何、又之れが指導の中心たるものの熱烈牢固なる意氣如何、眞劍味の勇氣洋溢の度如何、即ち根本は結局人の魂の問題に外ならぬのであります。人間の理念も實現も其の起る泉は何れより湧き出るのでありませうか、決して議論や規則や形の上でなく、現實に即したる躬行實踐の現はれでなければ断じて効果が擧らぬことは明々白白であります。其の臣道の實踐は心膽の底より湧き出づる赤誠の塊でなくてはならぬことも亦明々白白であります。而して其の指導するに其の人を得るにあらざれば徒らに反感を買ひ是非の批評に終り容易に行はれ難きことも是亦明々白白であります。故に楠公精神を經緯とし其の實行顯現は一般國民の心にして亦平時の心であり、非常時の心であらねばなりません。是れ實に全生命であります。此の全生命の任務を仕遂ぐるには非常なる決心と努力とを傾倒せねばなりません。現在未來の國民の覺悟如何、昔は平時でも何時死なねばならぬ覺悟を要しましたが、今は有難き御代に生れ戦時の外には死することの要なきに甘へ、争ふて闇取引をも敢て行ひて恥とせざるが如き責任と緊張味が自體

に起らないのであります。實に思はざるの甚しきものと存じます。要するに我々國民は神勅の旨を奉體し天業恢弘、天下光宅の大御心に副ひ奉り一億一心即ち心と心、力と力とを合せ誓つて臣道實踐奉公の誠を致せば搖ぎなき大八洲は勿論、國家は益々安泰となり、皇運は彌榮えに榮え萬々歳であります。

尙、楠公の最後の戦死の狀況に就ては太平記の記述が特に有名であります。夫れは々々獅子奮迅の勢にて花々しき決死の戦闘振で一步も退かず、機既に疲るるや湊川の北に當る在家に入り鎧を脱ぎて、其の身を見るに切創十一ヶ所、其の他の七十三人の者共何れも五六ヶ所の創を被らざるはなしとのことあります。楠一族十三人、手の者六十餘人六間の客殿に二行に並びて一度に腹を切つて果てにけりとのことあります。之に先だち楠公は主上に對し奉り、且つ御詫を申上げ且つ御暇乞を申上げられたることあります。時に正成と正季との兄弟が七たび人間に生れて朝敵を滅さんと語り合ひ嬉しげなる氣色にて、いざさらばとて共に刺違へて同じ枕に本懷を遂げられたとの趣であります。嗚呼楠公の精忠は六百年の後に至るも愈々光り輝きて遺芳香ば

しく世道人心を維持し、國民精神の上に大なる感化を與へて居ることは千古を貫く偉大なる武士道の權化、臣子の龜鑑なりと謂ふべしであります。殊に大命に對し奉りては絶対服従と云ひ、大君の爲に一族悉く節に殉ずるに至りては永世に涉り特筆大書すべきことであります。

大君のみことかしくみ磯に觸り

海原わたる 父母をおきて

斯くすれば斯くなるものと知りながら

止むに止まれぬ 大和魂

林中將は第四師團長在任前より夙に楠公を崇拜せられ又楠公の築城法、戰略、戰法を研究して造詣頗る深く著書亦尠ならず、其の御話には楠公ほど研究すれば研究するに従ひ益々其の誠忠人格徳望に打たれ自づと頭の下るものは楠公の右に出づるものなしと感ぜさせらるゝとの事であります、さもあるべしと存じます。

因に楠公精神を以て、天皇御親政の昔にかへしたいと志したるものは七卿を始め十



會下山の身方塚

津川の志士、天王山の義士、生野擧兵の人々著名のものがあります。三條公は配所に於て菅公を祭り、又共通精神から楠公をも祀られ、忠勇義烈の念の宿らんことを自ら祈られたることは文書にある通り實に楠公精神に生きんことを誓はれたものであります。楠公に參戦したる七百騎は現今ならば靖國神社に祭らるべきものであるかと存ぜられます。今は湊川に攝社として祭られ又無名戰士は神戸の有志に依り會下山に墓を建て英靈を慰めて居ります。

以上無秩序なる且つ拙なきこの講演を終るに當り御清聴を感謝致します。同時に若しも私のこの講演が幾分にも御參考となりますれば、望外の幸であります。此の講演は昭和十四年三月十七日大阪ロータリー俱樂部に於て述べましたものでありますがこの講演後之れに訂正増補致しましたことを念の爲め御斷り致して置きます。又淺學



なる私の研究足らずして誤謬の點も定めし少なからざりしことを恐れて居る次第であります。尙此の講演は無論楠公史蹟の一部分に過ぎません。是亦念の爲めに申添へて置きます。

今や宇内の形勢に鑑み我國亦未曾有の重大時艱に際會し眞に臣道實踐の誠を實行し奉るの秋に方り、特に楠公精神の昂揚を強調し謹みて皇運の隆昌を祈り此のお話を終るここに致します。

敷島の大和心を人間はば

朝日に匂ふ 山櫻花

(終)

楠正成卿の祖先は、人皇三十一代敏達天皇の玄孫を葛城王と號す。然るに元明天皇の御宇和銅元年十一月二十五日、天皇群臣を集め遊宴なされける時、葛城王に浮盃の橋を賜はり、是を以て汝が姓とすべしと勅命をなし下さる。其後聖武天皇の御宇天平七年十月朔日、從三位葛城王同舍弟佐爲王に橋宿彌を賜はりぬ。葛城王其日諸兄と名を改め給ひ、同じき十年右大臣に任じ、同じき十五年五月左大臣に轉任あつて、同じき廿一年四月正一位に敘し給ふ。然るに聖武天皇の御子孝謙天皇の御宇天平勝寶二年正月廿七日橋宿彌を改めて朝臣と號すべしと勅命ある。其後同じき八年二月諸兄公逆心の企ある由、讒言する者ありと雖、天皇許容坐さず讒者の申す所敢て實と思召されざりしかども是より官職を辭して致仕し給ひける。然るに此公は山城國井手の里に別殿を營ませ常に此處に坐せしかば井手左大臣と號しけり。其假山水石の跡今に至つてありとかや天性醜醜を愛し給ふ事甚しければ此里井手の玉川は醜醜の名所にて花の盛の頃は岸の醜醜を映し色なる浪の打寄せて類なき眺望なる

を愛で給ひて、醜醜限なくを眺め蛙の啼く聲に心を澄し風詠の仲立となし給ふ此處は又井手の蛙とて其啼く聲餘所に勝れて清朗なり。醜醜も高堤の邊には今は纔かに残れるなり。されば諸兄公其愛し給ふの餘りに玉川に醜醜の咲ける所を直衣に繡にして常に之を着し給ふ。其後胤之に倣ひて水に醜醜を畫きて家の紋とせり。然るを後人誤つて菊水なりと思ひけるを末葉の人も共に誤つて菊水となしけるなり。其後人皇六十一代朱雀天皇の御宇天慶年中藤原純友、平將門と心を合せ返逆を企て東西に起りし時純友征伐の爲小野好古、藤原慶幸、大藏春實以下數萬の官軍勅命に依つて西國に發向し大に純友と攻戦ふ、此時諸兄公十代の後胤橋少將經氏も勅命を奉り大に戦功ありしかば、其賞として河内、備中兩國を恩賜あり。是より子孫相續いで河内の國に住しけり。

斯くて少將經氏より十一代の後裔を河内守成綱と號し、河州金剛山の麓七郷を領し居住せり。然るに成綱其性好んで楠を愛し己が居館追手の馬場に楠を數株植ゑ置

たり、又常に近習の輩に語つて曰く天地の間に生ずる所の諸木多しと雖、中にも世に愛する所は櫻、藤、梅の類を以て最上とす。是れ陽氣を受けて花開け紅白の色を争ひ、其匂を四方に散ずさるに依つて折に觸れ氣色に附けて題詠するもの之を愛す然れども詩歌は公家の翫ぶ所にして我家のものに非ず。さありとて強ち之を捨つるには非ず君子も有行餘力則學文とこそ宣ひし。其外には古より、松を愛し或は柳を好むと雖、某は之を好まず。其故如何となれば、柳は花も咲かざれども春は陽氣を待ち得て緑の色を顯せり。されども素より氣力無うして怯弱の士に似たり。松は最も木の情盛なり。花咲かねど色香もなしと雖、十八公色深雪中春秋を知らずして、露霜にも衰へず。諸木の花は黄ばみ落つれども、松は其色常盤なれば、残る松さへ嶺に淋しきなど詠みしなり。楠は其情剛強にして松に似たりと雖、又松に似るべくもなし盛長することは餘木に劣つて少しと雖、雪折もなく究めて大木は楠にあり。其勇強なることいふべからず。後には磐石となりて不朽に傳はり、永世に至つて、

天地と共に長久を保つもの楠あらずして何ぞや。最も武士の愛すべきは楠なり。我之を思ふが故に此木を朝暮に愛すること甚しとぞ語られける。此の如く楠を多く植ゑ置きて朝夕之を愛せられしかば、是より世人楠殿々々と呼びし故、成綱それよりして自ら楠河内守とぞ名乗られける。

(以上南朝太平記より抜萃)

因に楠姓の一字に書くのは太平記以後にして其の以前は皆楠木の二字にして楠正成は楠木正成が本當であり、教科書にも今は悉く楠木とはなり居れり。

## 七 生 説

吉 田 松 陰

天の茫々たる一理あつて存し、父子祖孫の綿々たる一氣あつて屬す。人の生やこの理に資して心と爲し、この氣を稟けて體と爲す。體は私なり心は公なり。私を殺し公に殉ずる者を大人となし、公を殺し私に殉ずる者を小人となす。故に小人は體滅し氣竭くれば腐爛潰敗また收むべからず。君子は心、理と通ずるが故に體滅し氣竭くるとも而も理獨り古今に亘り、天壤を窮めて未だ嘗て歎きざるなり。余聞く贈三位楠公の死なんとするやその弟正季を顧みて曰く、先づ我が心を獲たりと。耦刺して死せり。噫これ深く理氣の際に見る所有しなるか。この時に當りて正行、正朝諸子は則ち理氣相屬せるものなり。新田、菊池諸族氣離れて理通ずるものなり。これによつて之を言へば楠公兄弟は徒に七生のみにあらず、初めより未だ嘗て死せざるなり。これより後

忠孝節義の人、楠公に觀て興起せざる者なし。即ち楠公の後復楠公を生ずる固より計り數ふべからざるなり。何ぞ獨り七度のみならんや。余嘗て東遊三たび湊川を経て楠公の墓を拜し涕淚禁ぜず。その碑陰に明の徵士朱生の文を勒するを觀るに及びて復淚下る。噫、余楠公に於て骨肉父子の恩あるにあらず。師友交遊の親しみあるにあらず。自らその涙の出づる所を知らざるなり。朱生に至つては則ち海外の人、反つて楠公を悲しみ吾も亦朱生を悲しむとは最も謂れなきなり。退いて理氣の説を得て乃ち楠公、朱公及び余不肖、皆この理に資して以て心となししを知る。則ち氣屬せずと雖も而も心は則ち通ぜり、これ涙の禁へざる所以なり。余不肖聖賢の心を存して忠孝の志を立て、國威を張り海賊を滅ぼすを以て妄に己の任となし、一跌再跌して不忠不孝の人となり、復面目あつて世人に見ゆるなし。然れども已に楠公諸人とこの理を同じうせり安んぞ氣體に隨つて腐爛潰敗せんや。必らず後の人をして余に觀て興起せしめ、七生に至つて後可となすべきのみ。噫、これ我に在るなり七生説を作る。

### 櫻井驛趾ニ立チテ感アリ

一 瀬 条 吉

忠ハ日月ヲ貫キ、義ハ古今ニ絶シ、父子雙美、萬世芳ヲ傳フ、嗚呼六百年ノ昔、大楠公ハ西南ヲ指シテ一畫ヲ、小楠公ハ東南ニ向テ一畫ヲ朴鶻斷腸ノ一聲ト共ニ、綿々烈々燃ユルカ如キ心血ヲ灑イテ、人ト云ヘル一大文字ヲ、身ヲ以テ大書シ、攝河泉ノ天地ヲ縫ヘル青葉茂レル櫻井驛ニ、人ト訣レ人ト結び根強ク人タル印象ヲ大地ニ深刻シテ、正シク楠公魂ヲ成シ、明カニ日本精神ヲ行ヒテ、忠孝ノ大道ヲ如實ニ示セリ。

願フニ皇天大楠公ヲ降シテ、神意ヲ人ニ傳ヘシム、故ニ公奮ヒ起テ身ヲ率キテ衆ニ先タチ、私ヲ滅シテ公ニ奉シ、一族難ニ赴キテ悉ク其ノ節ニ殉ス、其ノ至純至誠ニ

シテ心事ノ高潔ナル、七生報國ノ表現トナリ、人ノ人タル明鑑トシテ典範ヲ千載ニ垂レ、餘光赫々、治ク八紘ニ輝キ、遺訓昭々、今尙世道人心ヲ指導シテ祖國愛護ノ念ヲ啓發スルモノ眞ニ偉大ナリト謂フヘシ。  
要スルニ天下ノ事、人ヲ以テ第一義トシ、道由リノ行ハレ、風以テ興ル、凡百ノ經綸ハ固ヨリ國民精神ノ根本悉ク人ニ在リト高唱スル所以、實ニ茲ニ存ス、敢テ燕言ヲ敘スト云爾。

楠公史蹟小編成

大義敘來人道明

成田松坡

永使神州振正氣

寄詩深謝我翁誠

題一瀬糸吉翁著楠公史蹟小話後

昭和十五年九月二十八日印刷  
昭和十五年十月三日發行  
昭和十七年三月十一日再版

「楠公史蹟小話」

〔非賣品〕

著者

一

瀬

糸

吉

兵庫縣武庫郡住吉村字花田一四〇三ノ一

發行人

一

池

上

虎

大阪市北區堂山町七〇

印刷所

大

原

印

刷

大阪市西區京町堀上通二丁目

印刷人

大

原

庄

太

大阪市西區京町堀上通二丁目

正 誤 表

七七頁

正 圖をおもふみちにふたつはなかりけり  
軍の場にたつもたぬも

誤 圖を思ふ道に二つは無かりけり  
軍のにはに立つも立たぬも



終

